

ごった煮

ソーマ＝サン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

? ふと思い付いた話を投稿する短編集のようなもの。

? 妄想して書いただけで肥やしにするのは勿体無く思ったため投稿してみた。

? 現在、IS、ONE PIECE、NARUTOを投稿中。

? ※それぞれの話が完結するかは、思い付きに過ぎないので作者にも分かりません。

# 目次

IS 女装操縦士

2 人目 | 1

織斑一夏の憂鬱 | 6

重圧 | 14

体力測定 | 20

ヒント | 24

織斑千冬の微笑 | 29

ONE PIECE? 九蛇の男児

九蛇の男児 | 32

NARUTO 閃光の生き写し

転生 | 49

卒業演習 | 68

卒業演習2 | 84

思いつきの設定  
魔法科高校の劣等生 | 94



# IS 女装操縦士

## 2人目

? インフィニット・ストラトス  
I S

? 従来兵器を凌駕する圧倒的性能を白騎士事件を期に世界に見せ付け、本来想定していた「宇宙空間での活動補助機」という面から飛行パワードスーツとして軍事転用されたマルチフオーム・スーツ。

? そんなISを起動出来るのは女性だけ。開示された「自己進化」という設定以外が一切不明の心臓部のコアの為に選定により、如何に男性が触れようとISが起動する事は有り得ない。

? その日まで、世界はそう、認識していた。一体どんな神の悪戯か、織斑一夏という少年が誤って起動するその日まで。

? 初の男性適合者が現れたという報せは、瞬く間に世界中に届けられた。

? I Sの台頭により急速な勢いで広がった女尊男卑の風潮に突如射し込んだ男性にとつての希望の光。あらゆる政府が反対者の声を押し切つて強硬に、そして迅速に、<sup>こそ</sup>挙つて男性にもI Sの適性検査を行つた。

? 男性にとつて結果は芳しく<sup>かんば</sup>なかつたが、それでも高い検査数値を叩き出し、I Sの起動も<sup>こな</sup>熟して現れた2人目。

? 彼には織斑一夏のように世界最強のI S操縦者、それに準じた者が身内いる訳でなければ、その生みの親とも言える篠ノ之束と面識がある訳でもない。

? ある程度起動理由に推測の余地のある“1人目”でさえ、はつきりとした事は分かつていないのだ。その上で、父親が幼い頃に病死し、家族内男女比が1:6という以外少々兄弟姉妹が多いに過ぎない“2人目”には、輪を掛けてそういった原因究明の為の切っ掛けが、全くとつて良い程に存在しなかつた。血縁関係を洗つてもめぼしい結果は得られず、立てられるI S起動の要因は憶測の域を出なかつた。

? そんな<sup>くだん</sup>件の彼は、男でありながら「女尊男卑」と叫ばれている現状を、別段苦とは思わなかつた。

? 厄介な者を柳に風と受け流す、或いは精神的・物理的に徹底排除する術を知つていたし、<sup>たかだか</sup>高々兵器の世代交代如きで性差を槍玉に挙げる片腹痛い政治家・評論家の類も、彼等彼女等の自覚する惨めさを、お目出度い大衆の共感を得て紛らわしたいとする、ある

種の馬鹿の集まりと蔑視していた。自慰行為同然に恥ずかしくも頭の悪い世迷い言を尿道の緩んだ年寄りの如くだらしなく垂れ流し、人気者を気取って自己陶醉に耽け、剩え小賢しくも現実から逃避している舌先三寸、と方に一つの好意も抱かず見限っていた。その尤もらしく声高らかに主張する様に、傀儡宜しく無様で滑稽に踊っている脳内お花畑な連中にも同様。

？そうしてその考えを確固とするように、女尊男卑の風潮にあつて不思議哉、彼は人に愛されていた。性別で態度を変えない平等性を持つにも関わらず、時折辛辣な言葉を発するものの男女問わずから好かれていた。

？それは華奢な体付きが原因で脅威足り得ぬと判断されるが故か。将又その優れた容姿故か。

？本人はその「何故か？」の答えを知らないが、ともあれ、その環境故に、「女尊男卑」を掲げる世界は彼にとつて一笑に付して当然のもの。熱り冷めればまた別の世論が古い考えを非難しに動くのだらうと、冷めた眼差しで眺めていた。

？そんな者が此度入学するＩＳ学園。女子校に於ける男性教諭並に、それ以上に肩身の狭い思いを強いられる事になると予想されるパンドラの箱。とは言え、端から「希望」は封入していない欠落品。

？もし、「希望」を“箱”の中に望みたいのなら、外部から持ち込む以外に手は存在しな

い。つまり、男子入学者自身の手に依るといふ事だ。

？無論、何を指して「希望」と呼ぶかは男子各々に依りけりだが、平穩無事をそれとして望むのであれば、木を隠すなら森の中とするのが最善か。

？故に、彼は、女装する。

？物珍しさ故に怒涛の勢いで到来するであろう女子生徒・その他諸々からの質疑応答を避ける為、高い確率で同クラスとなるもう1人の男子生徒をスケープゴートに仕立て上げる為、彼は不慣れな女装に手を出す事を是としたのである。

？一見血迷ったようなこの行動の裏には、多分に金銭的な事情が介在した。

？これまで男子操縦者がいなかった為に、男子用制服というのは規格外品。女子制服と比べて些か値が張る。

？そして彼の家はお世辞にも裕福な家庭とは言い難い。隣家からの音漏れは当たり前。格安住居に、買い物好き多数の8割型女所帯。

？制服などというたつた3年ポツキリしか使わない高級品の購入資金を捻出するのは、母や姉妹の性質上、一言「無理」と言わざるを得なかった。

？そんな理由もあつて、姉とは進路を別にした、IS学園に入学し既に卒業している姉の友人から女子制服を譲り受け、また別の友人から学園指定のジャージを、またまた別の物持ち良い友人から女子用ローファアを、「デート」と書いて「荷物持ち業務」と読む



付き合いと引き換えに一式揃えた。

？それが彼にとって、男子生徒にあるまじき完全装備となった。

？そうして来る<sup>きた</sup>4月、彼はI S学園に入学した。

## 織斑一夏の憂鬱

「はあ……」

？ 織斑一夏は自分でも気付かぬ内に深い溜め息を吐いていた。

？ 針の筵むしろ同然に突き刺さる好奇の視線。精神統一を極めた武人でもない一高校生にとつて耐え難いそれは、席に座っただけの彼が、何時いつ何時なんどき動き出すのかと一挙手一投足を見逃さんばかりの熱い注目。どんな動きであっても動き次第、容易く巻き起こるだろう周囲の反応を回避するため、彼は努めて無反応を貫かざるを得なかった。

？ その無言の圧力と称するに相応しい無数の目を、無遠慮に精神力を削られながら耐え忍ぶ。

？ 「女子生徒が多いだけ」と高を括っていた過去の見込みの甘さを、彼は無理矢理支払わされている気分であった。

(……けどまあ、俺の席がここでもよかった……)

？ だが、その中であつて救いはあつた。

？ 一般的な学校の生徒であれば大多数が望まない教卓前。教室最前列の中央席。彼が

座るのは不良生徒が教師とメンチを切り合える座席だった。

？尤も、贅沢を言えば最前列の右端か左端が良かったが、それでも最前列にあるというだけで何物にも替えられない喜ばしい事実。下手に女子生徒と視線を交わす恐れがない事が、今は何より有り難かった。

(……今日は熟睡出来そうだな、ハハ……)

？心配事が一つなくなった事で、枕を高くして眠られる。そう思うと嬉しくもあり、そう思わざるを得ない事に悲しくもなる。授業開始前の午前にして、彼は既に諦観混じりの苦笑を零す。

？内なる一夏を確認出来れば、きっとその目は光を失い、死に瀕している事だろう。現実の彼でさえ二次元で描かれる理想と体感しているリアルとの乖離に折れかけているのだ。最も感情が剥き出しとなる心では寝込んでいるに違いない。

？そんな彼の内心など露知らず、挟むように座った両隣の女子生徒が一夏の悩ましい苦笑に興奮する。

？互いに目配せをして「かつこよくない!!」「うん、かつこいい!!」と以心伝心。握った手を勢いよく上下して、体全体で昂<sup>たかぶ</sup>りを表現する。

？訝しげに一夏が眉根を寄せるも彼女等が気にした様子は一切ない。事実、互いに脳裏に焼き付けたレアショットの出来の良さを共感する為、ちよつとしたトリップに浸って

いた。

（女子つてやつぱりよく分からん……）

？「うーん……」と唸つて彼は窓の方へ視線を向ける。然りげ無くチラツと、思考を破棄して目を向ける。

？教室の女子全員に言える事だが、先程から飽きずに、その中でも乗せる色の異なる視線をくれる者が1人。

？騎手が丁寧な毛繕いした馬の尻尾のように艶やかなポニーテールを頭から生やし、貫かんばかりの眼力で以て彼を睨む。

？背後に鬼気迫る激みが立ち昇っているように見えるのは、決して彼女の髪に結われたリボンを見間違えたからではないだろう。彼にのみ視認出来る何らかの非実体物質が立ち込める。

（いきなり恨み買われるような事した覚えはないぞ……、にしても……）

？辟易した中で、しかし頭の片隅に何かが引っ掛かる。

？一瞬とも呼べる短時間の確認で捉えた顔立ちは、何処か見覚えのあるものだった。

？然りとて、それが誰であつたかを周りの空気が思い出す事を許さない。まじまじと見詰め返す事を許さない。

？魚の小骨が喉に引っ掛かるような違和感を覚えながら、頭を悩ませる事に埒が明かな

いと中断しようとした——丁度その時、滑らかに教室の引き戸が開かれ、1人の生徒が入室した。

「ん……」

？風邪でもひいているのか保健室で貰えるような白いマスクをした女子生徒は、自分の席を探して教室をぐるりと見渡す。

？だが、そこにはまだ空きがある。自分が何処に座れば良いのか分からなかったのだろう、入り口に近い座席に近付き、相変わらず視線を一夏に釘付けにした生徒の机を指で叩いた。

「うん……??え??あ、どうした、の?」

？トントン、と微振動を感じ見上げた彼女。その目と交錯したのは、伸びた前髪の間から見下ろす熱を感じさせない眼差しだった。

？冷たい、というのではない。これまで有り得なかった男子がいるのに、その焦げ茶色の瞳に何の感動も浮かばせていないのだ。

？だが、敢えて何らかの感情を読み取ろうとするのなら、それは「馴れ」であろうか。

？別段女子校と銘打っていない以上、男子も女子もいて当たり前。特別燥ぐ理由もその必要も見出せない、としているようだった。

「席はどうなってる?」

? ハスキーな声で坦々と。不思議と安心感のある声音で紡がれた。

? その際、すっかり伝えんと引き下げられたマスクから完成された顔立ちが顕<sup>あらわ</sup>になる。

? 長い睫毛を備えた切れ長の眼<sup>まなこ</sup>。流し目1つで他者を虜にする色気に溢れ、双眸の間には

鼻筋がすつと通る。その先には高くも窄<sup>すぼ</sup>まった小鼻があり、浅い人中を過ぎて薄い唇が、鋭い顎が、声に連動して小さく動く。

? I S 操縦者は軍事利用の印象を和らげるという名目でもあるのか、時にアイドルとして活動する者もいる。白マスクの彼女は、そんな彼女等に負けず劣らずの端整な顔立ちの持ち主だった。

「び——っ!」

? 慌てて、尋ねられた彼女は口を押さえた。勢いのまま放とうとした言葉を手で押し返し、ゴクリと飲む。

? しかし、耐えられたのは彼女だけ。

? ある種の無音で占められていた空間に、唯一響いた音を無視出来る者はいなかった。

? 自然と移ろう興味。一応顔だけ確認して、また唯一の男子生徒の観察に戻ろうと皆が目を向け、

「び、美人さんだあ……!」

? 辛抱堪らず誰かが言った。

？最適な位置に最適な形状のパーツが並ぶ、正しくクールビューティー。少しでも甘い言葉を囁けば女性であろうと腰砕けになる事必至の破格の美貌。おまけに長身と来た。？教室内の彼女等にとつて羨まずにはいられない容貌だった。それが喻え、胸部に何ら<sup>づか</sup>悶えるものなく平坦であつたとしても、そのマイナス分を帳消しにするだけの数多の良点がそこにはあつた。

『美人』か。それはありがとう、かな？』

？「美人」と言つた女子に向けて仄かににこつと。微笑を浮かべて礼を述べる。そして途中でその返答で良いのか戸惑い、苦笑に変えて小首を傾げた。

？一斉にわなわなと震える生徒達。

？そして次の瞬間、

「「きやああああああつっ!!!」」

？窓ガラスを震わす勢いで、黄色い声で絶叫した。

？叫ばれた当の本人はビクツと肩を跳ねさせ、ぱちくりと目を瞬<sup>しばた</sup>かせる。

？状況が飲み込めていない以上、至極適当な反応であつた。

「格あ好ッいいっ!!」

「でも可愛い!!」

「お姉さまって感じ!!」

?きやいきやいと一氣に教室が賑わう。

?先程まで席卷していた獲物を狩るような空気は何処へ行ったのか。アイドルに恋する少女相応の熱気に、白マスクの彼女は噎<sup>む</sup>せるように咳き込んだ。だが継続して、騒ぐ者をそのままに問い掛ける。

「けほっ……、……それで、席は?」

「ああつ、ごめんっ!!?えと、名前は?」

「名前?!名前は——」

「おい渡辺、いつまでそうしているつもりだ。さつさと席に付け。貴様等も静かにしろ」  
「——うっ……」

?名乗ろうとした瞬間、その頭にポスンと出席簿の平たい面が落とされた。顎を下げさせる程度の衝撃に言葉が詰まる。

?その状況を構築したのは織斑千冬。スーツの似合う長身で、渡辺と呼ばれた生徒と違って女性的な起伏に富んだ肉体の持ち主。織斑一夏の姉にして、出席簿を凶器に変えるという特異な単<sup>ワン</sup>一<sup>オフ</sup>仕<sup>ア</sup>様<sup>ビ</sup>能力<sup>リ</sup>を生身で備えた「ブリュンヒルデ」の称号を持つ最強のISS使い。

?彼女の性格は厳格。鬼と呼ばれる程で、規律に厳しい女性である。

「席が分からのなら前を見ろ。視野が狭くては操縦者として生き残れんぞ」



？お叱りを受け、渡辺は振り返る。ホログラム電子ボードの右隅にA4サイズで座席表が写っているのを彼女は認めた。

？<sup>さなか</sup>最中、姉がI S学園で教師業をしているなど知らなかった一夏が「千冬姉!？」と驚くも、出席簿を突き付けられ即座に『織斑先生』と呼べ。公私混同するな」と修正と同時に短い説教を受け、そして栄えある「ブリュンヒルデ」が担任という事で先程とは比較にならない爆発的な喝采が飛ぶも、「静かにしろ」との一喝の元、直ぐ様教室内は表面上の落ち着きを取り戻した。

「あ、確かに。えと、1番後ろか……」

「分かったなら座れ、H Rを始める」

？確認を終えたところで着席を促され、第1回I S<sup>モント・グロツソ</sup>世界大会総合優勝者を前にしても何ら取り乱さなかった彼女は、その見目形に些か不釣り合いなスカートの下からジャージを履いた足で自らの席に向かって歩き出した。

？この時、この場に織斑千冬がそれを指摘しなかった事を疑問に思う者はいなかった。

## 重圧

？ 副担任によるHRを終え、1時間目に突入して現在、一夏の教室では出席番号とは関係なく前後に、順々に自己紹介と相成っていた。

「——つて事でみんなと仲良くしたいです！？よろしくお願いしますー」

？ たった今、快活な声で締めくくったのは右から2列目中頃の女子生徒。前髪をゴムで括ったショートカットが特徴的で、送られた拍手に照れ臭そうにはにかんでいる。

？ しかし、織斑一夏はそれを知らない。自己紹介を終えた人数が2桁に突入しているにも関わらず、そもそも彼には他人を気にかけるだけの余裕が皆無だった。

？ その理由は単純明快。

？ 女子の中にポツンと男子。不慣れな環境に放り出されては、「振り向いて確認」するという行為1つが並々ならぬ精神的苦痛を伴う。

？ ただでさえ遠慮なしに突き刺さる視線に疲れを感じているのだ。既にして彼の心中は一杯一杯だった。

？ そこに追い討ちをかけるように出現したある障壁。担任教師——山田真耶により提

案された自己紹介。逃げたくなるが、なけなしの氣力を振り絞って直面しなければならぬその内容思案。

？「鈍感・オブ・鈍感」の称号を不服にも友人から授けられた彼は、異性が喜ぶような自身の表し方を知らなかった。

？故に悩む。これでもか、と言わんばかりに現在進行形で必死に。

（女の子ってのはあれだろ……、弾が言うには甘いものと可愛いものが好きなんだろ?? 千冬姉と違って甘いものを献上すれば何でも許してくれて、そして千冬姉と違って可愛いものを差し出せば簡単に機嫌が良くなる、そんな俺の身近には終ぞ見<sup>つい</sup>なかった、けれど世界には有り触れた存在なんだろう？

？なら、俺を物理的に甘く可愛い男に見せれば万事解決……?——いや、意味分かんねえよ……。 「物理的に甘い男」とか病氣だろ、我ながら流石にねえよ。それに「可愛い男」って何だ。フリル付いた服とか着んの??想像しただけで気持ち悪い）

？あれでもないこれでもないと思考が巡る。

？ぐるぐるガラガラと、回転式おみくじの如く多数の玉が、抽選機意見頭の中で跳ね回る。

？それは一夏として嘗てない程の高速回転だった。

？そうは言うものの、女子生徒の興味はやはり男性操縦者の自己紹介に焦点が合っている。それぞれの自己紹介は各自の名前に一言二言付けて最後に「よろしく」という簡素

なもの。1人当たり30秒もかかっていない。

？如何に回転が速かろうと、十分な時間を稼ぐには心こころ許ゆるない。彼の番は直ぐそこまで迫っていた。

（——てかもう女子ばつかのところに男子1人つてのがまず間違つてんだよ!? “2人目”はどうした “2人目” は……!? “一緒のクラスにもう1人も入れたから安心していい” っって言われて期待してたのに、いねえじゃねえか!?! 嘘教えて上げて落とすとかどうなつてんだよ校長!? あんたそれでも教育者の長かよ……!?! そしてどうすりやいいんだよ自己紹介!!）

？机上に肘を付き、組んだ手を口元に当て、真剣な眼差しで壇上の教師——低身長ひしんの割に西瓜を胸にぶら下げた真耶を見詰めるようにして、一夏は心の内で悲鳴を上げる。某司令官の如き姿勢でごちゃごちゃになった考えを廃棄しつつ、半ば脳機能の低下に見舞われていた。

「——織斑君、織斑君?! 次、君の番ですよ?」

「え?! あ、はいっ!」

？そんなところに回つて来た自己紹介。

？一夏は担任教師の呼び掛けに我に返つて、慌てて席から立ち上がった。

？そして多数の女子生徒が座る後方に体全体で振り返る。

「あー……」

？ 正面から相対<sup>あいた</sup>する事になった女子を倍する視線に、蛇に睨まれた蛙の如く動きを止める。

？ 黒髪、茶髪、金髪。色のバリエーションは主に3種。

？ 対して顔付きは、HR直前に入室した女子生徒のクール系から始まり、くりつとした大きな眼の可愛い系、釣り目の見た目ツンデレ系、にこにこしたのほほん系と様々。

？ 「あれ??俺って以外と冷静?」と思いの外<sup>ほか</sup>落ち着いて観察出来ていると感じ、小さく独り言<sup>ご</sup>つ。

？ 彼は意を決して口を開いた。

「俺、織斑二夏。男子操縦者候補。以上」

？ 周囲からは溜めに溜めたように見えた一夏から流れ出たのは、シンプルの粋を極めた単語4つ。一人称代名詞、固有名詞、役職名、自己紹介終了の合図。

？ 期待に胸を膨らましていた生徒達が、揃ってガクツと頭を落とした。勢い余って机に額をぶつけた者もいる。それ程に期待の度合いが大きかったという事だ。

？ 遠慮も糞もない反応を目の当たりにしたその本人は、と言えば、

（昔の偉い人も言っていた。「シンプル イズ ベスト」と。一層<sup>いっそう</sup>投げ遣りなくらいが1番そいつの人物像が伝わるんだよ!?!だから残念みたいな空気出すなよ!?!泣くぞつ、盛大

に男泣きするぞ……!」

? 先程より悲痛な悲鳴を上げていた。

? 一夏の受けたダメージは計り知れない。彼の背後から響く千冬の溜め息も、その心の罅を拡大するのに一役買う。

「えー……つと、織斑君は織斑先生の弟さんなんですよね??……はい、えー……織斑君、ありがとうございました」

? 担任教師の気遣いが、彼には有り難くも、痛かった。

「渡辺空。ISの事はあまり知らないから得意な人は教えて欲しい。料理がそれなりに出来るからそれと交換でもいい。よろしく」

? 一夏が意気消沈しつつも順調に自己紹介を進め、白マスクの女子生徒が最後に終えた。

? その後1週間の予定が知らされ、1時間目終了後に追い討ちをかけるようにイギリス代表候補生が一夏に突っ掛かるという事態が起きたものの、幼馴染みであった事を思い出した篠ノ之箒に介抱されながら項<sup>うなだ</sup>垂れた彼が、雀の涙程の精神力で取り合う筈もなく、問題なく1日の授業を全て消化し解散となった。

？そうして情けなくもあるが、自室にまで箒に送られた一夏はそこでルームメイトが箒である事を知り、箒もその事実を知り、互いに驚く場面があつたとかかなかつたとか。

## 体力測定

?翌日。

?一夏にとってそれは無慈悲な宣告に等しかった。

「早速だが、基礎体力の有無を調べる。各自2人組を作れ」

?1、2組合同の体育という事で一夏は薄々嫌な予感を覚えていた。それが千冬の言葉で確信に変わる。

?授業内男女比1対数十。“2人目”がいるという話だったが、着替えの際も姿が見えない事から校長の法螺<sup>ほら</sup>であるとしてその比率。

?その状況で千冬は「2人組を作れ」と宣ったか。

?ここ、IS学園に於いて男子というのはレア中のレア。しかも一夏の見目は優れると来た。

?彼と組もうと躍起になる生徒は決して少なくない。寧ろ多いと断言して良い程だ。

「えっ!?!?ちよ、千冬姉!?!」

?「織斑先生」と呼ぶのも忘れて声を上げる。



？彼としては己が標的、或いは景品と見定められている事は勿論知らない。そこは不名誉な称号を冠するから当然であつて、ならば何故、声を荒らげたかと言えば、偏ひとへに不慣れと言うに他ならない。

？無数の女子の視線にあてられながら、その根源である女子とペアを組む。

？学園に入學して1週間経つまで半分以上日数の残る現在、当然の如く彼は視線に晒され慣れていない。組んだ者から至近距離で見詰められる事にも、慣れよう筈がない。

？故に彼は、どうせ視線が刺さるなら遠目から、が御所望だつた。つまり、一夏1人で1組形成が彼にとっての最前だつた。

？しかし無念、その願いは聞き入れられない。

『織斑先生』だ。お前は渡辺と組め、異論は認めん」

？愛用の出席簿で渡辺を指し、指名する。

？その渡辺は、上下長袖ジャージを肘前・膝下あたりまで捲り上げているような格好で、その落ち着きの払い方は立つ場所が違えば、つまり生徒の中ではなく副担任の隣にいれば、まるで教師。そんな彼女は千冬の言葉に軽く体を解ほぐしながら頷いた。

「うつ……!!? 反論の余地も与えてくれないのかよ……!!」

「そもそも何故お前が不服なのかが私には分からん」

？苦虫を噛み潰したような表情の一夏に、然も当然と千冬は腕を組む。心底分らない

と思つてゐるようで不機嫌そうに眉間に皺も寄つてゐる。

「そりや、ついこないだ初めて顔を合わせたばつかだし……」

「誰でも最初はそうだ。不思議な事ではない」

「自分でも我儘に過ぎないと理解しているのだろう。尻窄しりすぼみの反論は案の定、容赦なく千冬に切り捨てられる。

「そうだけど、気心知れた筈の方が……」

「い、一夏!?!わ、私でいいのか!?!」

「当然だろ?!……千冬姉、頼む!」

「筈が声を跳ねさせるも、一夏はその機微にはやはり疎い。単純に突然名が上がった事に驚いたのだらうと納得して、千冬に対して両手を合わせて頭を下げる。教師に向ける仕草ではないが、その必死さは苦悶の表情もあつて伝わつて来る。

「千冬は呆れたように溜め息を吐くと、今回の授業で使う備品が点在する、「運動場」と言うより「陸上競技場」と言う方がしっくりくるトラックを眺める渡辺の名を呼んだ。

「渡辺、お前はどうか?」

「相手が誰であれ構いません。それに多少なりとも競うのなら、少しでも拮抗している相手の方がいいですし」

「? 振り返つた。」

？その顔には挑戦的な微笑を張り付け、一夏の事を一瞥する。

？同じ組では50 m走や砲丸投げ等を除き、一方がしている時に他方はそれを測定しなければならぬ。別の組であればその必要がないため一夏と競いたい彼女としては、別々である方が都合が良いのだろう。丁度互いに利害が一致している事もあって、頑なに同じ組み分けを主張する事はなかった。

「そうか。一夏、ならばお前は篠ノ之と組め。後は適当に2人組を作れ。砲丸投げと50 m走を測る時は私に声を掛けろ。体育館内での測定は山田先生の指示に従え。各々、適当なものから測り始めろ」

？その言葉に1年2組の中国代表候補生が一夏の組み分けに文句を垂れるも、これ以上面倒な調整に時間を掛けたくない千冬は聞く耳を持たず、首から下げる2つのストップウォッチの調子を確認しながら、50 m走を計測するトラックのゴール位置に向かって歩き出した。

## ヒント

?それは正しく風のようだった。

?一切の抵抗を感じさせない、空気を切り裂くというより掻き分けるような、風と一体になる軽やかな走り。伸び伸びとした動きとは裏腹に、一步蹴り出す度に着実に前へ前へと体を押し出す。

?両者を比較すると幾分細い脚からどうして自分相應の速度を叩き出せるのか、一夏にはそれが不思議で堪<sup>たま</sup>らなかった。

「一夏、6秒2。渡辺、6秒4。2人とも十二分に速い。この調子で他の項目にも励め」  
?弟の成長に僅かながら喜悦を滲ませ、千冬が賞賛の声を上げる。

?そのコース周辺には、一夏の走る姿を焼き付けようと1、2組の女子生徒が立ったり座ったり、各自楽な姿勢をとって人垣を作っていた。千冬としても、IS学園に在籍する女子生徒が稀有な男子生徒に興味を示すのは至極適当な反応であるとして、大目に見る事にしたようだった。

?そんな観客と化した大多数が、一夏のタイムに想像以上と思わず驚きの表情を浮かべ

ている。そして彼に勝らずとも劣りもしない渡辺の疾走に、それ以上の驚愕を露にしていた。

「渡辺、お前つて滅茶苦茶足速いんだな。中学3年間アンカー任されてて自信あつたのに、ちよつと、いや正直かなりシヨックだわ」

？額に滲んだ汗を半袖体操服の袖で拭い、一夏は息を整えている渡辺に苦笑混じりに話し掛ける。

「いや……、こつちも50m走に関しては……、はあつ……舐めてたところがあつた。お互い様、かな……、ふう……」

？走り方からは少しも全力を出した風に見えなかったが、かと言って手を抜いていた訳でもないと彼が理解していた彼女は、膝に手を付き、肩で息をする。

？それに一夏は体力では自分に分があるようだと、年頃の男の子らしい優越感を覚えて自然と苦笑を笑みに変えていた。

？彼女の荒い吐息に感じたのはその程度であつて、一部女子生徒のように何処か漂う艶めかしさから情欲に近い感情は彼の中では湧き上がらなかった。

？◇

「「織斑くん!? 頑張つて〜!!」」

? ハンドボール投げ、立ち幅跳びと行って、現在持久走。周長400mトラックを3と3/4周の1500m走。

? それを走るの、一夏は勿論、

「「渡辺さんも頑張つて〜!!」」

? 渡辺もそうだった。

? だが、これは可笑しな事だった。彼と彼女が持久走の項目に於いて同距離を走る。

? ハンドボール投げは僅差で一夏に、立ち幅跳びは渡辺に。拮抗し、自然と競い合う形となつていた事で特に深く考える者はいなかったが、1500mという距離は男子規定。女子であれば1000mが普通である。それは中学生も高校生も変わらない。

? 如何に女尊男卑と言えど、一般的な男女間で身体的な優劣が覆りはしない。にも関わらず、千冬はその事を指摘しなかった。

? それは患<sup>わづら</sup>ったブラコン故の、弟に花を持たせたいとする不公平さが根底にあるからでは当然ない。教師という立場上、そのような見苦しい姿を、公私混同を、口酸っぱく一夏に説く彼女が見せる筈もない。

? ならば何故か。

? 渡辺とは。

? 千冬と同じような、肩に届くか届かないか程度の女性にとつての短髪。

? 化粧を施せば一層妖艶になる事間違いないの、現状化粧つ氣皆無のそれでも端整な顔立ち。

? スラリと伸びる手足を備えた170cmを超える長身に、極薄の胸部装甲。

? どこからどう見ても女子生徒そのもの。ハスキーボイスが多少普通とは言いがたかもしれないが、100人女性がいれば1人2人は見付けられる程度の希少性。何ら疑問を抱く点は存在しない。

? 一端の女子生徒ならそこで思考が終わってしまうだろう。

? けれども、もし、一夏が彼女との競争に熱中するのではなく、違和感から彼女の正体を考えるだけの余裕を持っていたのなら、彼は直ぐにでも真実に辿り着けただろう。それだけの証拠が彼の手元には揃っていた。

? 校長から知らされた「2人目」は同クラス」。その厳しさを知る千冬が「渡辺の格好を注意しなかった」。男女別の筈の「持久走が同距離」。

? もう1つに、彼に向けられる視線に特別な色がなかった、というのもあるのだが、この数日で強制的に刷り込まれた「女子生徒」何らかの意思を込めて視線を向ける者」という認識が邪魔をしてまだ氣付けていなかった。会話の回数が数える程しかないというのも原因にある。

？ともあれ、経済的な理由から女装紛いの格好をしている“2人目”に気付ける存在は、一夏にとつては不幸にも、今の段階ではいなかった。



## 織斑千冬の微笑

「なるほど……」

「一夏と渡辺の競い合った先日に加え、今日の午前にも行った体力測定。その結果を手元に、千冬は基礎体力の観点から生徒達の大凡の鍛錬方法の目処を付けていた。

「一夏にはこれといった苦手分野はなし、か。渡辺は……体力に難あり、と」  
「記録用紙を一枚捲りながら、呟く。

冗談のような男女比から男子の用紙だけを選別しての比較。そうして態々<sup>わざわざ</sup>2人のデータを選び取ったのは、身体的な特徴から男女間では記録の比較に有意な考察を得られないため。

女尊男卑の世になろうと、根底にある身体能力の差は依然男性優位なことに変わりない。

故の一夏と渡辺、2者の比較であった。

千冬の現段階での見立てでは、男子2人のバランスは非常に均整の取れたものであった。

片や持久力に優れ、愚直な型で最高点を記録する織斑一夏。

片や人として持つべき身体機能を熟知した動きで、巧みに最高点を記録する渡辺空。何の因果か、たった2人の男子生徒は彼等だけで柔剛合わせ持ち、そして高い水準で纏まっていた。

それは『現段階では』という但し書きが付くものの、どちらかが突出することがないということ。即ち双方高め合うに相応しい存在であり、好敵手として、或いは何れは並び立つ戦友として、歩みを共にすることを半ば確信させる存在であるということ。

千冬が抱いたそんな感想は、彼女が欲して止まなかった心の支えを渡辺の中に見たらなのかもしれなかった。

彼女にとって、一夏とは確かに心の在り処であつたことに変わりない。身近に存在する唯一の肉親であるのだから当然である。

けれども、時として一夏の存在こそが枷になることもまた、純然たる事実であつた。嘗て、幼い身ながらも弟を守らんとする使命感は、当時の彼女には些か荷が重過ぎた。本来頼るべき親という存在が彼女等姉弟を真つ先に捨てたために、彼女は誰にも信を置けなかったのだ。だから子どもながらに『抜き身の刃』を想起させ、近づく者全てを拒絶するように、彼女は弟と生きていかなばならなかった。

そんな折に——相反するように——彼女がどれ程同じ目線に立ち、語り合える人間を

得たいと思つたのか。恐らくこの話を聞いた者が想像する以上に、強く千冬は渴望していたに違ひなかつた。

だから彼女は、弟に——一夏に、そのような存在ができるであろう未来を心底嬉しく思つていた。

ここ数日の生活態度から、渡辺は多くを語らない性格のようではあるが、あれはあれで一夏との相性は悪くないように見える。

海辺、或いはプールサイドでアイスでも齧りながら「暑い暑い」と文句を垂れながら語り合うのが、彼等2人にはお似合いのように千冬には思えていた。

そんな想像を浮かべて、千冬は人知れず口角を上げる。

未永く一夏の友人として在つてくれ、との願いを胸に秘め、彼女は意識を切り替え今後の体育<sup>訓練</sup>のグループ分けを考えていくのであつた。

## ONE PIECE? 九蛇の男児

## 九蛇の男児

? 女系戦闘民族九蛇くじやの住む男子禁制の女人国——女ヶ島にようがしまの朝は今日も早い。

? 日が昇る前には目を覚まし、一緒に眠った女性の額にそつとキスを落とすと、俺は彼女を起こさぬようベッドを抜け、垂れ下がった布を掻き分ける。

? 部屋を出れば当然そこには通路が伸びる。風の抜け道として、ガラスも何も嵌こっていない朱色の窓枠だけが等間隔に配置され、皆が起き出す頃になると少々混み合う石造りの共同通路が、左右に緩ゆるやかなカーブを描えがきながら伸びている。

「く、ふあ……」

? その棧さんに肘をつき、欠伸と共に胸一杯に吸い込んだ清々しい空気。体内に新鮮な空気が入るように体熱も入れ替わり、熱帯とは言え床から直じかに足を通して冷えが頭の先まで駆け抜ける。肌寒さが背筋せすじを撫で、反射的に身震いした。

? 目尻に浮かんだ涙を、腕で擦こするように拭ぬぐう。

? ジャングルに囲まれた高い山に空く大きな穴、そこに挿鉢すりばち状に築かれた九蛇の集落。

その広大な眼下に目を向ければ、蛇姫様の住まう宮に続く石階段の踊り場に薄暗い中でちらほらと篝火が焚かれていた。

？ 明かりを行動範囲の中心に据え、不審な者がいないかの見回りを、ピンヒールを履いた足で危なげなく行う夜番が数組。彼女達は一様に蛇を連れ、相も変わらず露出度が高かった。

？ ビキニのように乳房を覆うだけのトップスに、腰に巻いたパレオ。更に下には無論秘部を隠す三角布があり、肩からは外套を羽織る。

？ それでも、裸の上から一枚布だけを被る野性味溢れる俺とは大違い。とは言え、決して俺の巻いている布も襦袢切れなどではなく、しっかりと遇えて貰ったオーダーメイド品。

？ 女ヶ島では蛇が暮らしの中に溶け込んでいる。それを模して赤い織物の縁取りは蛇行する蛇の柄。布中央には尾を銜えて円を象る白い2匹の大蛇が刺繍され、蛇の遺骨を組み合わせた大きな目の留め具が、長方形の短辺に――着れば丁度鎖骨の辺りから脇下にかけて、ポンチョのような形態で、布をずり落とさないように付属している。

？ 成長に合わせて着熟しの変化を強いられ、現在、詰めて調整されてはいるが膝下まで垂れ下がるこれは、皆が俺のためにと作ってくれた最高の宝物だ。

？ さて、俺の格好の説明はここまでにして、まず向かうは水場だ。そこで顔を洗い、一

通りの身嗜<sup>みだしな</sup>みを整える。それを終えると蛇姫様姉妹のとする食事の用意である。

? 竈<sup>かまど</sup>に火を入れ、侍女達と昨夜考えた朝食メニューを作りにかかる——のは普段であつて、今日は新鮮な果物を御所望だったと思ひ出し、いつもの癖で薪を取りに行こうとしていた足を、行き先を変更して階を上がる。

? 厨房に着くとまだ誰もおらず、食器棚に付いた引き出しから収獲用ナイフ3種類と厚手の平たい袋を1つ、迷う事なく取り出した。全ての刃物を袋に挿<sup>さ</sup>し入れ首から提<sup>さ</sup>げると、『妾<sup>わらわ</sup>は珍しいフルーツが食べたいのじゃ』と仰<sup>おほ</sup>つていたけどどうしようか」などと思案しながら、ぺたぺたと裸足で階段を降りて行く。

? 寝静まった廊下には、朝明け前の暗くも白んだ光が射し込んでいる。靄<sup>もや</sup>がかかり、何処か神秘的で静穩。無造作に岩を組んで出来たような内装であるのも相俟<sup>あひま</sup>つて、まるで別世界に迷い込んだような心地がする。

? それも暫<sup>しばら</sup>く進むと現実<sup>じやうじ</sup>に引き戻される。

? 宮の入口で焼<sup>く</sup>べる火により、橙色の揺らめきが壁に灯る。その暖かな色合いの中に人影が舞う。實際踊<sup>おど</sup>っている訳ではないが、火の揺<sup>ゆ</sup>るぎに合わせて不定形にくねる事でそう錯覚する。

? ゆるり、ゆるりと。

? ひたひたと足音が反響し、動く影法師に近づいていく。更に道は続くが、外へ出るた

め交差路を左に曲がった。

？　そうして眼前には両開きの朱い門。噂に聞く巨人が入れるとは思わないが、ハーフ程度なら問題なく通れる巨大な門。その隅に前持って開かれた小さな扉——夾門を潜り抜け、俺は静かに外に出た。

「あらつ、リーズ早いねえ」

「ふふつ、朝から頑張るわね」

？　頭を下げて出たところで、寝ずの番をする女戦士が俺に気付き、振り向いた。「おはよう」と挨拶をしてひらひらと手を振るう。

？　彼女達は揃って腰に矢筒を吊るしている。しかし、矢はあるのに肝心の弓を持っていないのは、首に巻き付いたり、腰に絡んで肩に頭を落ち着けたりする細長い蛇達がその役割を果たすからだ。実に島民の生活に蛇が密接に関わっている。

？　そんな2人の内、真つ先に驚いたような反応を示した嗶れ声の戦士——アイビー。彼女は強い者こそ美しいとするこの島で、外見からして見るからに「強者」とした太ましい体躯を持つ、男勝りな短髪の女性。腕は俺の胴体程あり、脂肪なんぞ欠片もないと言わんばかりに筋肉質に隆起した厚い鳩胸、腹部は見事なシックスパック。背筋も筋肉で覆われ漢らしく、太股も膨ら脛も、上半身を支えるに不足なしの周囲を誇る。生憎、御尊顔は強さを鑑みたとしても俺の美的感性からは逸れ、些か頬骨が主張され鰓の張つ

た大きなものだが、あまりある人の良さは折り紙付きだ。

？一方、昨日、扉の開放を約束していた事で驚きに似た表情は浮かべなかったものの、いつまでも変わらず俺の歳を低く勘定して感心したような声を上げる戦士——ロゼット。アイビーの、柔らかさとは無縁の鳩胸とは感じる母性に雲泥の差のある豊満な乳房を持ち、また、彼女と違って長身。ウエストは折れそうな程細く、ヒップは肉感的にポリウムたつぷりで、足はすらりと引き締まって且つ長い。その上性格も柔和で、笑えば見惚れてしまう。一片の疑いなく正しく女性と断言出来る彼女は、その我が儘ボディに見合わず物理的な実力も兼ね備えていて、アイビーと同様、九蛇海賊団の一員だ。

？彼女等2人は、帰って来る度に武術の手解きをしてくれる俺の特訓相手である。

？対して、俺は今年で12になる。四季のないこの地域で、1年の経過を一目瞭然と自然から感じるのは困難だが、時々<sup>おおよそ</sup>の獲物などから大凡の数値は推測される。そうしたところ、俺が生まれてから大体12年くらい経つだろうという大雑把な数え方が出来上がるのだ。

？この島の女性は、外海に出て妊娠し、帰国して出産すると、理由は不明だが、必ずと言っていい確率で女子を産む。以前であれば「必ずと言っていい確率」ではなく「必ず」であったが、それに終止符を打った最初にして最後の例外が、皆から「リーズ」と呼ばれる俺である。



？女系戦闘民族九蛇くじゃでありながら矛盾する唯一の男。俺の持つ特異な肩書きである。

？一般に、男性が入国すると死罪となるか、何らかの理由で特別措置が取られて牢獄暮らしとなる。

？だが、俺は紛れもなく九蛇の母親から生まれた為、例外中の例外、特例中の特例として女ヶ島「アマゾン・リリー」での生活が許可された——らしい。俺を出産した後亡くなってしまった母に代わって2年前くらいにロゼットから聞いた話で、真実か嘘かは分からないのだ。まあ、嘘を吐く理由もないので真実だと思うが。

？そして、父親が誰かも分からない。が、ここに住む者は往々おうおうにして父を知らない為、然したる問題はないだろう。

「今日は蛇姫様のためにジャングルに行くのかしらね？」

「うん、珍しい果物が食べたいんだって」

？夾門きやもんを閉めてくれたロゼットの質問に、首に吊るした袋をトントンと指で叩いて頷いて返す。

？成長途上の背が彼女の鳩尾辺りまでしかない所せ為で、自然と見上げるような格好となる。撓たわわに実ったメロンが視界を遮る。

？アイビーは腕を組んで仁王立ちして、見せ掛けは見張りに戻っているようだった。

「へえ、新しいのが見つかるといいけど……ちよつと私のも採って来なよ。何でもいい

から」

？階下を眺めながら声だけでアイビー。

？相変わらずものの頼み方が雑。

「アイビー、何を言っているの。……リーズ、蛇姫様が第一だから無理にアイビーの分まで採って来なくて大丈夫よ？」

？アイビーを見て、溜め息を吐いて彼女を咎め、視線を俺に戻してロゼットは言う。

「そこところは大丈夫。だけど……分かった、ちゃんとロゼットのも持って帰るよ」

「ふふつ、ありがとう」

？自身の黒い長髪をさつと払い、ぎゅつと頭を抱<sup>かか</sup>えるように抱擁された。それに答えて俺もその腰を抱き締め返す。

？九蛇の皆が、俺にとつての母であり、姉妹であり、家族である。

？数瞬だけ肌の温かみを感じ、どちらからというでもなく腕を離れた。

「アイビー、行つてきます」

「はいはい、手の掛かる子供だねえ」

？アイビーともハグをして、俺はジャングルに向かって空を跳んだ。

？因みに、通路の窓枠や厨房から跳び出さなかったのは、一度はしたないとこつてり叱られた経験があるからである。逆も然り。

？◇

？自身十数人が手を繋いでやつと一周出来る大樹が当然の如く乱立し、身の丈以上の草花が平然とスペースを確保して生えている。環境が環境なので至るところにキノコが繁茂し、やはり俺の半分以上の身の丈で群れていた。

？途中、そのキノコを選び好んで食べる巨大猪の群れと遭遇したが、蛇姫様の御所望の品ではないので無視して珍しいフルーツがないかと疾走する。

？鬱蒼と繁るジャングルの中を直駆ける。景色は矢のように過ぎて行き、後方に留まる事なく流れ行く。

？この高速移動を可能にしたのは、飽くまで副産物。

？「覇氣」の扱いに精通した皆の助けと、島にいる間は土台成就不可能な「男に会ってみたい」という俺の好奇心を、偶々聞き入れてくださった蛇姫様のお陰。主に、王下七武海としての立場がある筈なのに、手土産として、「六式」の幾つかを習得した海兵を攫って来てくださった蛇姫様——アマゾン・リリー皇帝ボア・ハンコック様を筆頭とし

た九蛇海賊団のお陰である。

？地上では瞬発的に加速し、消えたように移動する<sup>“ソル”</sup>。空中ではその応用技として爆発的な脚力で大気を蹴り、宙に浮く<sup>“ゲッポウ”</sup>。

？俺の修めた六式は海兵の習得していたその2種だけだが、他にどのようなものがあるかは聞いたので現在練習中だ。とは言っても、覇気をロゼット達に叩き込まれたので、態々残りの六式を覚える意義は薄いように感じている。結果、六式習熟は現状、暇潰し以上の意味は持っていなかった。

？因みに、件の海兵がその後どうなったかは知らない。皆を見る目がねつとりとイヤらしく、嫌悪感があつて、外界の人間に、それも男に親しさなどそう湧くものでもない、と話をしていると感じたのでどうでもいい。海王類の餌になっていると望ましい。島民第一である。

？それは扱置き<sup>さてお</sup>、新鮮な果物狩りの時間である。

？まずは集落周辺のジャングルを一周する形で地上を大まかにぐるり。次いで樹上を適当にぶらり。

？太陽が地平線から昇り切るまでを制限時間として探し回り、

「案の定、だな……」

？その結果得たのは馴染みのある、逆を言えば真新しさのないものばかりだった。

？四角形の模様がびっしり入り、俺の頭程の大きさの黄色いパイナップル。鮮やかな赤さでぶつぶつとした外皮を持ち、内部が白く半透明のライチ。赤色から緑色へと見事なグラデーシヨンのなかった橙色の繊維質な果肉のマンゴー。赤紫色の果皮で、時に赤く、時に白い身の詰まったドラゴンフルーツ。濃い黄色で、反り返った腕程の巨大なバナナ。黄色がかった緑色で、仄かに甘く、切り口が星型のスターフルーツ。などなど。

？馴染みの有無に関わらず、数のある物はその場で試食し、酸味が強過ぎたり苦味が強かったり甘ったるいものは採って来ずに、脳内メモに書き留めてある蛇姫様の好みに合わせて厳選。厳しい審査に残ったのは、やはり馴染みのあるものばかりとなってしまうた。

？一通り採り尽くして、その上で好みか否かの判断基準が出来ていたので仕方がない。

？収穫したものを簡単に葉を編んで作った背負える形の籠に入れ、俺は九蛇の集落に帰るのだった。

？◇

？要塞化している集落の城壁上を通り、市場に出す品を獲りにジャングルに繰り出す者と擦れ違い様に短い挨拶を交わしつつ、俺はそんな正規ルートは知らんと城壁から飛び

降りるように月歩で跳んで帰還した。

？宮で門番をするロゼット達に「ただいま」という言葉と、後で直接部屋に差し入れる旨を告げ、開かれた本門を通り抜ける。埃の類は城壁の上で叩いてきたので指摘される事はなかった。

？これからするのは、岩盤を削り貫いて出来た冷暗所に流れる小川で、御姉妹が起床されるまで採って来た果物を冷やしておくのと、盛り付けの細部を詰める思案である。ただ、パイナップルはバナナ程群生していなかったもので、パイナップルがある場合とない場合の2種類の盛り付けを考えなくてはならない。味見時の評価次第で出すものが変わってくるのだ。

？そうと決まれば見聞色の覇気で宮をまるっと収め、内部の様子を確かめる。

？九蛇の皆が活動し出すため、身近に人の気配を多数感じる。

？その中でも、一際異彩を放つ生命力——アマゾン・リリー皇帝ボア・ハンコック様。

？それより数段劣るが他の者より輝く気迫が2つ——彼の妹君、サンダーソニア様とマリーゴールド様。

？彼女等に付き添う若者にも劣らぬ壮健な気——ニヨン婆様の愛称で慕われる先々々代皇帝グロリオサ様。

？以上4名の覇気が殊更強く感じられた。

？やはりと言うべきか、御老体になられたニヨン婆様は既に活動を開始しておられるようだ。蛇姫様の元にいらつしやるのも、眠りが浅く、お目覚めが早かったのが御理由だろう。己を基準に若い蛇姫様等を無理に起こしてはまた寢室から窓の外に放り投げられるに違いないのに、どうにも懲りない御方だ。御歳おとしの割にアクティブである。

「あ……」

？身近だった感覚が物理的に近付いて来る。ニヨン婆様が宮の外に投げ飛ばされ、落下しているようだ。

？蛇姫様も蛇姫様で美しく華やかではあるが、子供のようにやんちゃな一面が偶たまに顔を覗かせる。

？綺麗であると同時に可憐という印象。常人ではそうそう並び立たせる事の出来ない印象と思うが、そこは流石蛇姫様というところか。

？さてはて、攻撃的な色に染まったこの御様子では、再び眠りに就くとはあまり考えられない。それほど冷えてはいないが、かと言って集落外の川で洗いつつ冷やしつつ果物を探していたので、特別温ぬるい訳でもない。そのまま盛り付けてお出ししても問題ないと結論付け、冷暗所に向かつていた俺は踵きびすを返した。

？駆け足気味に廊下を歩き、階段を登る。

？帰って来た厨房には顔馴染みの料理人の姿があった。彼女達は戦士の朝食をこれか

ら作るようで、大きな鍋を用意したり、野菜を切ったり、いない者は追加の肉の買い出しに行ったり、足りないその他の食材を買いに行ったりしているようだった。

？邪魔にならないように素早く彼女達の後ろを通り抜け、皿を洗うための水を張った桶の中に平たい袋から収穫に使用したナイフを抜き、放り込んでおいた。

？そうして代わりに、引き出しから新たに包丁と吊り下げて乾かしていた<sup>まないた</sup>俎を取り、隅の机の一角を借りる。盛り付け用の皿、それと収穫した果物も広げ、パイナップル以外を豪華な皿に手早く乗せていく。馴れた手付きで彩りも考慮して配置し、「パイナップルがなくとも見栄え良く」を今回の標語に盛っていく。

？瞬く間にフルーツの塔が出来上がった。それも3つ。

？我ながら上出来、などと眺める暇もなく、パイナップルの味見に入る。

？手に持った包丁に覇気を纏わせる。刃物に武装色の覇気を使う事で黒く変色し、<sup>なまくら</sup>鈍でも鉄を断てる硬度に向上する。包丁の切れ味が悪い訳ではないが、見た目が少しでも悪くならないよう、果皮に引つ掛かる事なく切るための知恵だ。

？予定通り、<sup>まないた</sup>俎に注意してストンと縦に半分に切り、更に縦に半分こ。4分の1ずつを盛り付けに使い、残りの4分の1を味見に用いるのである。

？<sup>へた</sup>蒂下、芯、皮の直ぐ内側、芯と皮の中間、底部分の果肉、と細かく切り出し、それぞれを口に入れる。



? はず<sup>へた</sup>下部分。

? 一度二度、もぐもぐと口を動かす。

(ふむふむ、少し酸っぱいか)

? いつもものと変わらない慣れた味。問題があるとすれば、少しばかり酸味が強い事くらいか。

? 冷静に分析し、三度目と歯を噛み合わせた。

「ん……?」

? 異変に気付いた。

? 濁流<sup>さなが</sup>宛らに滲み出た果汁。ごくごくりと飲み込めばジュースのようで、爽やかな風味が鼻を抜ける。

? そうと分かれば絞ってジュースとしてお出しするのも名案だ、などと思っていたのも束の間<sup>つかま</sup>。

「……んっ? んんっ……? ? ?  
!! ? ? ?  
!! ? ? ?  
!! ? ? ?」

? 利用方法を検討するだけの余裕は一瞬で吹き飛んだ。

? ぶわっ!!? と体中の穴という穴から汗が吹き出る。

? 口内に広がる邪悪と、叫び出そうとする精神を抑え付け、震える膝から頰<sup>くずお</sup>れる。武装色の覇気が強制的に解除され、手から滑り落ちた包丁が<sup>まないた</sup>俎の上に音を立てて転がった。

(あぐうおおおお~~~~っ???)酸っぱあつ……!!滅茶苦茶つ、酸つつつっばいつ!!?)  
 ? 拳を作るように、床に押さえ付けて両手を握る。体を丸め、ガリガリと爪が立つ痛みと合わせて意識を保つ。

? 急に酸味が口の中で跳ね出した。味を細部まで確かめようと噛み締めた瞬間、これまで感じたことのない刺激が爆発した。

? これはそう、覇気だ。蛇姫様から感じた霸王色の覇気。このような例として出すには不適切極まりないが、他者を屈服させるという面を見れば、正しく覇気に違いなかった。

? 急いで飲み込み、手近にあった瓶かめに入った水を柄杓ひしやくで掬すくって口を濯ゆすぐ。

? これで和らぐだろうとひんやりした冷水が口に入った途端、

「げっ……!!」

? 酸味が渋味に変わり、盛大に嘔むせた。口端から吹き出た水が床を濡らす。間一髪、瓶に入る事は避けられた。

? どうしたのかと調理の手を止め、寄つて来ようとする料理人を手で制し、何事もなかったとパイナツプル強敵の前で仁王立ち。

? 耐え忍ぶ事数秒。強烈な波が引き、体の震えが治まった。

「……けほっ、はあ……」

? 他の部位ももしかするとこんな感じなのかと戦慄しながら、召使いの流儀に従い毒味

を続ける。

？次は芯部分だ。堅い外皮に沿った果肉は、これまでの経験から味が似通っている。ならば同じ轍てつを踏みに行く必要はない。

？繊維が蜜に詰まった芯をぱくり。警戒しながら舌の上で転がす。

(……酸っぱくは……ない。どちらかというと甘い、な)

？それも甘過ぎず、程良い。酸っぱいものを食べた後にこの感じ方という事は、やはり酸味は強めなのだろうか。

？意を決して顎を動かす。上顎と下顎の間で揺り潰す。

「うぼア……」

？反射的に変な声が漏れた。

？今度は途轍もなく甘い。果物を煮てジャムを作る事があるが、それを何十倍にも濃縮した頭が痛く、思考力を蝕むような味。サトウキビから精製した砂糖の塊を、飲み物を飲むが如く流し込んだような味だ。とてもではないが食べられない。

？吐き出すのは衛生上宜しくないから、止やむを得ず鼻を摘つまみ、これまた嚥えん下する。そして水を飲み、

「アアアアアアアア~~~~~!!?」

？辛味に変わってのたうち回った。

? 辛味は鼻を塞いでいても関係ない。ダイレクトに脳を焼き切る痛み。勿論比喩だが、舌の上で火事が発生したように錯覚して、ひりひりどころかビリビリする。

? そうして二種類の果肉が胃袋で落ち合って、

「うぷっ!」

? 耐え難い吐き気に見舞われた。

? 物理的に込み上げる気がして、俺は廁かわやにすっ飛んだ。

? 総評として、不味い。

? 廁から戻って今更ながら果皮の細部に目を向けると、四角く区画分けされた中で渦巻き模様が散見された。このパイナップルはちよつとした突然変異種なのかもしれないかった。

## NARUTO 閃光の生き写し

## 転生

「ん……あ……」

? 浮上した意識に体が小さくびくと跳ねる。

? どうやら俺は組んだ腕を枕にして、いつの間にか机に突っ伏して眠っていたらしい。

「くうっ……」

? だらしなく垂れた涎を拭うと、一度大きく伸びをする。その動作に合わせて背筋がポキポキと小気味良い音を立て、首も左右に倒せば同じように骨が鳴った。

? そうして体中に纏わり付いたストレスを一通り解消したところで、俺は寝惚け眼で辺りを見渡した。

? そこは、カフェのようであった。

? バーテンダーを思わせる年老いた男が、カウンターの向こう側で湯気の立つティーカップに口を付ける。客の入っていない円形の木製テーブルを幾つも見遣りながら、自らの淹れたコーヒ―、或いは紅茶の香りを堪能しているようであった。

ここは、閑古鳥の鳴く古めかしい喫茶店。店内にいるのは店主であろう老齢の男を除いて俺だけのようであった。

（あれ……？？なんでこんなところにいるんだ、俺は？）

？微睡みから覚め、意識がはつきりしてきたところで疑問が湧き上がった。

？それに従ってどうしてここにいるのか。

そもそもここに来る前は何をしていたのか。

そういつた諸々を思い出そうとして、

（んー……てか第一、俺は誰だ……？）

？最も根本的な問の前に掻き消されてしまった。

？欠如していたのだ。丸々抜き取られたように綺麗さっぱり。自分の名前さえ分からず、頭の中には何の残り香もなく記憶がすっぱりと欠落していた。

？奇妙な現象だ。

？だが、そんな事態に遭遇したにも関わらず、不思議と不安は生まれなかった。

？それは時がゆつくりと流れるこの店独特の空気のお陰か。それとも窓の外から照り返す暖かな陽光故か。恐怖と言うものは芽生えなかった。

（……まあ、いいか……）

？深くは考えず、ティーカップに手を伸ばす。

木目のはっきりした黒テーブルに寝入る前から置かれていたであろうそれは、今では冷めてしまつて香り立つ湯気はのぼっていない。

けれども、背凭れに寄り掛かつて店主のようにカップの縁に鼻を近付けければ、馥郁たる香りが鼻腔を擦った。

一口、口に含む。

？マスカット特有の爽やかな香りが鼻を抜け、目を瞑つて余韻に浸る。

素人ながら、記憶とは別——知識の片隅にある「アイスワインティ」という茶葉と似通っていることに気が付いた。恐らく、同種なのだろう。

俺は何度かその豊かな芳香を楽しむと、ずっと目を開いた。

「自分が誰か、それは分かるか？」

「……は……??え……? ん？」

？いつの間にか、正面に男が座っていた。

許可した覚えはないが、相席しているという事は俺の知り合いなのだろうか。

？それにしても告げられた言葉は意味深だ。まるで心を読んだようにピンポイントで探ってくる。

？とは言え、何の情報もない現状、素直にその疑問に返事をした。

「いや、分からないな」

「そうか。ならばお前が次の対象で間違いなさそうだ」

「対象……？」

？花の縁取りのあるソーサーに、ティーカップをかちやりと置く。

？まだ入っていた赤い液体が波立った。

「そうだ。ここに迷い込み、且つ記憶のない者は本来の輪廻から外れた者。そういった“はぐれ者”を“輪”の中に押し戻すのが俺達の役目。その対象が今回はお前、ただだけだ」

「なるほど……」

？つまり、俺は死人、という訳か。

？こうやって物に触れ、味も匂いも温度も感じておいて、既に死んでいるとは実感が沸かないこと甚だしい。が、逆に考えれば、先程から立て続けに不可思議な事象を体験している事こそが、ここが死後の世界である事の証左なのか。

そう考えると打って変わって素直に面白いと感じられる。

「それじゃあ聞きたいんだが、何でその『はぐれ』とかいうのに俺は？」

「さあな。お前は死んで、しかし漂白の途中で何らかの外力に弾かれてここに流れ着いた。俺に分かるのはそれだけだ。……何れせよ、俺の仕事はお前を再び在るべきところに還すだけ。一度食<sup>は</sup>み出した者を戻すのにそれなりの準備がいるから、今直ぐに、とはい



かないがな」

「へえ、ならずつとここにいれればいいのか?それとも何か手伝おうか?俺の事だし」

「手伝いはいらん、素人では邪魔にしかならんし。——代わりに、準備が整うまでの退屈しのぎとしてお前にはある世界に行つて貰う。人が作つた物語をベースとした世界だ、精々楽しめ」

「ふむ……それはありがたい、のか?」

? 人の作る世界ほど良い意味でも悪い意味でも、滅茶苦茶なものはないと知識が告げている。

剣の一振りで山が崩れ、海が割れ、空が落ちて来る、なんて事もあるそうだ。そんな人の形をしながら人をやめたような者と遭遇してしまえば、どうなるかなど分かつたものではない。

潰すべき時間を潰す間もなく、先に命が潰されるのは目に見えている。

? 正直、有難いかどうかの判断は付き難い。

「さあ、知識として覚えているなら住み易いかもしれんが……所詮、なるようにしかならんよ」

? 諦めも肝心か……。

「意志が固まればその紅茶を飲み干せばいい。それだけで世界を渡れる」

「随分簡単だな」

「暇潰しでしかないなら単純で当然。俺はもう行く。ここには残らずお前もさっさと行くんだぞ」

「ああ、了解した」

？　そう言つて男が席を立つと同時に、俺も残りの紅茶を飲み干す。

空になったカップに倣うようにして急速に薄れゆく意識の中、視界の隅で店主が腰を折つたような気配がした。

？◇

？　場面が転換した。

？　おぎやあおぎやあと、俺の口から赤子の産声が発せられる。気道確保の為に未熟な喉が震えている。

？　人の作つた世界ではあるが、どうやら無事に転生を果たしたようだ。

？　さてはて、一体どのような世界なのか。

？　目は開かず、水中にいるかのように音が遠くに聞こえて状況の把握が困難を極める。

？　今分かるのは、助産師と思しき人に羊水を拭われて布に包まれた事くらい。そうして

何か床のようなところに置かれ、布越しに硬質な感触が柔肌を刺激した。

？母親の腕の中でない事に一抹の不安を覚える。もしかすると出産の負担が大きかったのかと、そう考えて胸騒ぎが大きくなる。

？母親は無事か。息はあるか。

？意識としては赤の他人でも、子としての本能が母の生存を憂慮した。

？しかし、それは杞憂であって、

「……やつと、会えた……」

？慈しみに溢れる指で頬を触れられ、優しい女性の声で囁かれた。

？胸の何処とも分からぬ場所から安堵の気持ち湧き上がる。赤子にとって大きな心的疲労を理由に、俺の意識は沈んでいった。

？ぴちゃん、ぴちゃん、と。喉に落ちた雫のむず痒く流れる不快な感覚に覚醒した。

？獣の唸り声が聞こえる。この世に生を受けた当初より明瞭に音を捉える耳が、更に男女の会話も拾っていた。

「……クシナ、もう命が持ちそうにない……そろそろ八卦封印をやるよ……。……最後  
に一言、言いたい事を言っておこう……」

？死の間際に必死に絞り出そうとする男の声音。荒い息を吐き出す眩きに出てきた名前は、どこか聞き覚えのあるものだった。

？どこだったか。何の物語であつただろうか。

？命を賭して伝えられる言葉の前に、深く考えることなど出来なかつた。

？体がどうしてか酷く熱い。

？血液が肌の上に乗って通つて（かよ）いるように錯覚して、締め付けるように痛む心臓が早鐘を撞く。肺が収縮し、上手く空気を吸い込めない。

止め処なく湧き上がる不安に、制御出来ずに溢れた涙が（まぶた）瞼をこじ開けるように広がつた。

？ぼやけた視界の中、鋭利なもので貫かれた男女が精一杯の微笑みを浮かべていた。

？長い赤髪の女性に、金髪の青年。

？彼等が俺の両親なのだと、一目見た瞬間に理解出来た。

「……ナルト、一緒にいられなくてごめんね……」

？（ぼろだ）滂沱の涙を流す母の口から告げられた今世の名——ナルト。

？特徴的な名前をキーに、蓄えられた知識の中からその物語が引き上げられる。

一瞬で脳裏を過ぎる（よ）生誕から終戦への過程。膨大な情報量。

？しかし、脳内を占めるそんなものはかなぐり捨て、俺は彼等に触れようと腕を伸ばす。



? それでも生きている内に少しでも触れたいと強く願い、どうして体は動かないのかと心の底から悲嘆した。

(動け……!?!動いてくれ!?!父さんが……!?!母さんが……!?!まだそこで生きてるんだ!)

? 両親を貫いていた九尾の爪が煙となつて掻き消える。

? 重力に従い次第に傾いて行く父母の体。

? 眠たげに瞑<sup>つぶ</sup>られようとする彼等の瞼。

? そこで唐突に閃いた。

? 九尾の骨格で——人柱力として尾獣化直前のあの狐の骨格で、愚鈍な四肢を支えようと。最初にして最期に、親の温かみを知る為に、九尾のチャクラを利用する事を。

(九喇嘛……!?!俺にお前の力を明け渡せ……!)

? 深く深く、心の奥底に語り掛けた。

? ◇

「またワシを閉じ込めるか!?!小賢しい!」

? 精神世界。

? 檻の中で朱色の狐が吠えている。抉<sup>こ</sup>じ開けようと、封印の施された柵に体当たりを繰

り出した。

？けれども、施された封印は小揺るぎもしない。俺の中に押し込めた九尾を逃がさず、その役目を全うする。<sup>まっし</sup>

？そんな巨大な門を前にして、俺は薄く水の張った場に赤子の姿のまま立っていた。

「何だ小僧？！丁度良い、貴様如き食くろうてやるわ！」

？その瞳に俺を認めると一層猛る。牙を剥き、両親を刺し殺したように観音開きの門の隙間から俺を狙って爪を立てる。

？決して届きはしないが、九尾とてそれは百も承知。俺を萎縮させ、主導権を奪い取ったのだろう。

？だが、唯の赤ん坊でない俺に見掛けの恐怖など効果はない。

「……九喇嘛<sup>クラマ</sup>、お前の力を俺にくれ。今は貸すだけでもいい。父さんに、母さんに、触れたいんだ」

「っ？！ぬ、吐かせ<sup>ぬ</sup>！手をお貸すくらいなら死んだ方が増しだ！」

「なら、力尽くでも奪い取ってやる……！」

？見るからに未成熟な子が喋った事に九尾は怯<sup>ひる</sup>む。

？だが、悠長に話している暇など欠片もない。対話は後回しだ。

？母——うずまきクシナは封印術に優れたうずまき一族の血統。その血は俺にも流れ

ている。

？ならば、俺に封印術が使えない道理はない。

？印なんぞ知らん。チャクラの練り方なんでも知らん。全ては封印が為された時の感覚に従って、元々人並以上のチャクラを練り上げる。

「自由にしてやる代わりに力を貸せ！」

？力任せに四象封印をこじ開ける。今し方の封印を逆巻くように、身に起こった感覚だけで手探りで解封する。

「阿呆が小僧！」

？『封』と書かれた札が剥がれ落ち、重々しい音を伴い動いていく。鍵もなく、無理矢理弾けるように解錠され、ゆっくりと開いていく門の隙間に九尾は鼻から体を捻じ込んだ。

？吹き飛ばすように開門する。

？それを黙って見守る筈もなく、

「確かこんな感じ、かつ！」

？精神世界故か、忍術の融通がかなり利く。チャクラを練り、明確なビジョンを思い描く。えが

？それだけで虚空から無数の鎖が、門の前を走る巨大な通路で二者を隔てるように展開



される。

? 金剛封鎖。  
こんどうふうさく

? 原作では母が九尾を縛り付けた術だが、現状、動いている者を縫い付けるには俺の経験値が足りていない。所詮想像でしか一端の術を使えない今の俺では、動体の座標固定には失敗する。

? だからこそ、隙を生じぬ二段構え。駄目で元々、九尾を捕縛する鎖と道を封鎖する鎖を並行して発動する。そうする事で二度手間にはなるが、最終的には足の止まったところで九尾を雁字搦めにしてやれる。

「もういっちょ金剛封鎖!」

「ぐぬうつ……?!? 何故貴様のような赤子がこ<sup>やすやす</sup>も易々と忍術を扱える……!」

? 黄金の鎖で磔にされるように、四方に四肢を引かれた九喇嘛が困惑する。

? 戸惑うのも無理はない。だが、答えてやる余裕もない。九尾の力を引き出す 綱引き  
“ が先決だ。

? 掌から鎖の付いた楔<sup>くさび</sup>を放出する。その巨軀に打ち込み、膨大なチャクラを引き抜いてやる。

? これで逆に取り込まれようものなら俺の器はそこまでであつたという事。勝敗の目安は単純だが、絶対に果たしたい願望がある。それを無謀にも抱いてしまったのだ。意

地でも負ける訳にはいかった。

「お前には全てが終わった後で教えてやる！」

？破城弩の如く、幾重にも束ねた楔を撃ち出した。

？朱色の巨軀からチャクラだけが剥がれ掛かる。綱引きの要領で鎖により引つ張り出したそれは、しかし全体の3分の1にも満たなかった。

？時間がないというのに抵抗を受けて思うように進まない。

？焦りを抱けば引き戻され、手を煩わせる奴だと思えばまた引き戻される。負の感情がそのまま九尾の持つ憎しみによって増幅され、付け込ませる隙になっていた。

「うおおおおお!!!」

？雄叫びを上げ、頭に響く怨嗟の一切合切を斬り捨てて。思いの丈だけ、身の丈以上の力を振り絞る。自らを叱責し、宥め、純粋な想いだけを持つて鎖を引く。

？ぐぐぐと、九尾の形をしたチャクラが漸く半分顔を出した。

「ガキが図に乗るなアアアアアッ!!!」

？ぐわつと開いた口内で黒い気泡が収束する。

？肌を刺すような威圧感。大気を震わす重圧は、紛れもなく尾獣玉。

？正面から食らって精神体がどうなるか分からない以上、むぎむぎ溜めが終わるのを

待つてやる義理はない。

「こんなにやろっ！」

「ッ!？」

？綱引きならぬ鎖引きの補佐をしていた手を離し、九尾に向けて開き——閉じる。呼応して虚空からその長い口を巻くように鎖が伸びて固く縛った。

更にもし、尾獣玉を放たれても軽減出来るよう、通路に格子状に、蜜に、三重の金剛封鎖を展開する。

？向こうの攻撃はこちらのチャンス。尾獣という強者故の奢りは当然あつて然るべき。俺を「仕留めた」と錯覚させたその隙に、力の全てを抜き切つてやろう。

「小賢しい！」

？轟ッ!と鎖の壁の向こうで轟音が鳴る。

？やはり口を縛っただけでは足りなかったか。通路を形成していた壁や天井が呆気なく吹き飛ばされ、中空を支えとした黄金の壁だけが軋みを上げて耐えている。

？だが、あまりの威力に千切れ解けた鎖が黄金の粒子となつて解け消える。

？果たして本当に金剛封鎖の「壁」によつて放たれた尾獣玉の威力は減衰しているのか。

？最後の1枚となつた「壁」の中央が焦げるように変色する。

? 綱引きに興じている主要な鎖だけはギリギリのところまで繋ぎ止めてはいるが、右掌に感じる断裂音が不安を煽って仕方がない。その感情を押し込める。

? この手には母と父が手伝ってくれているのだと、そう自己暗示を掛け続ける。

? “壁”は揺るごうとも俺は決して揺るぎはしない。そんな事は許されない。両親の温もりを知らずに生きていくのは耐えられない。

? だからこそ、それを掴む為に最高のタイミングで精一杯鎖を引くのだ。

? 最後の“壁”が崩壊した。

? 少しも衰えていないように見える尾獣玉が、途轍もない勢いで床を捲る。水飛沫と砂埃を上げ、俺を木っ端の如く吹き飛ばすような風圧・速度で以て赤子一人分の真横を走り抜ける。遙か後方で着弾した。

? 世界を砕かんばかりに轟音が鳴る。

? 俺を隠した砂埃の向こうで、九喇嘛の油断した気配が伝わった。

? 鎖が緩み、引かずとも自らの中に戻っていくチャクラを見て、殺すまではいかずとも満身創痍となった俺の姿を想像したに違いない。それが罫とも知らずに。

? この瞬間を待っていたと言わんばかりに、静かに唸り担ぐようにして一気に引く。

? ずるりと、引き抜いた感触が伝わった。

? 引き抜いた九尾の力が俺の精神体に吸い込まれ、俺のチャクラと融和する。

? それは不思議な感覚だった。両親の愛を感じ、子としての愛で応えようとするそんな温かさがあった。

「ッ?! ガキがッ!!? 巫山戯るなアアアアアッ!!!」

? 切羽詰まった罵倒。

? 代わらず四肢を封じているが、それでも滅茶苦茶に暴れようとしているのが分かった。でも、暴れようとしているだけ。それだけだ。

「お前を自由にしてやるのはまた今度だ。今は眠れ」

? 痩せ衰えていく九喇嘛<sup>クラマ</sup>を尻目に、俺は出口を目指して振り返った。

? ◇

? 現実へと引き戻され、急速に意識が鮮明になる感覚があった。

? 水面から顔を出すように何らかの抑圧から解放され、目を開けば俺の眼下には倒れ伏した父と母。息を引き取り、寝入るように目を瞑った両親の姿があった。

「あう、あ、ああ……」

? 歯の全く生えていない口で呻くように声を出す。

? 間に合わなかった。赤子の足掻きは届かなかった。

? 虚無感。

? そう言えばいいのだろうか。努力が報われなかった虚脱感に見舞われる。

? 視界がぐにやりと歪む。

? 尻から生えた狐の尾骨が地面を貫き体重を支えているため、体が不安定に揺れている訳ではない。かと言って九尾の肋骨が肩の上から胸元を覆い、首の安定に貢献するため頭が情けなく揺れているのでもない。

? 涙だ。

? 耐えようとして耐え切れず。

? 留めようとして留められず。

? ただの憑依であるなら俺がこれ程心を揺さぶられる筈がない。一歩下がって傍観するであろうが故に、他人事で済む筈だ。

? だが、何故ゆえこれ程悲しいのだ。

? 何故、これ程に苦しいのだ。

「ああ……」

? これは俺が、この世界に一人の子として確かに生まれ落ちた証拠に違いない。家族の繋がりを持つて誕生したからに違いない。

(母さん、俺を産んでくれてありがとう……)

? 母の元まで近付き、髪を掻き分け、頬に手を当てる。

? まだ温かく柔らかい。

? そして父にも手を当て、頭を撫でる。

? つんつんと反発する金の髪。それが心地好く、笑みが漏れる。

(父さん、名付けてくれてありがとう)

? 子が成長していく上で両親の存在は大切だ。

? だが、文字通り俺の中に2人は生き続けている。

? それを俺は知っている。

? なら、親が死んだと悲しみ続けるより、彼等に胸を張っていられるように歩き続ける方が建設的だ。

? だから、涙を流すのは今だけ。

? 今だけは、両親に甘えよう。

## 卒業演習

？世に「九尾事件」と呼ばれる俺の生誕から早くも月日は流れ、原作開始時期まで差し迫っていた。

？この12年で様々な事があった。様々と言ってもたった2つだが、如何せん後者の内容が濃過ぎた。

？3歳の頃にはヒナタが攫われ、しかし、雲の国の忍頭を生け捕りに出来たお陰でヒザシの死体譲渡の件は回避され、ネジは捻<sup>ひね</sup>くれる事なくすくすく育った。また、同盟締結にも関わらず、愚かしくも日向家長女の誘拐に走った雲の国には、火の国優位の同盟を改めて取り付ける事にも成功した。

？両親が命を賭して守ったこの里、延<sup>ひ</sup>いてはこの国を好き勝手に掻き回そうした報いである。様見<sup>さま</sup>ろだ。奴等の頭の中には雲のようにスカスカな脳味噌しか詰まっていないに違いない。

？それから数年経って、うちは一族のクーデターを回避。

？これを決定した主な理由は国力低下を危惧して。



？うちは一族が存続し、イタチの抜け忍化も阻む事が出来れば、自然とサスケの抜け忍化フラグも折られる筈。そして写輪眼という血継限界も失わなくて済む。

？手放したり、殲滅したりは、余りにも頭の悪い対応だと言わざるを得ない。里の対応として、原作のように「切り捨てる」を選択するのは、一から十まで不穩分子の悉くを排除する選択を取るのとは、はつきり馬鹿げているとしか言いようがない。

？そういう理由で敢行した。これにより得られるメリットは、身近で言えばサスケの強化。イタチに暗部の仕事があり毎日とはいかないが、それでも兄弟での研鑽を積み続けられるため、成長率が大幅に向上するのはほぼ確実。道を正す立派な兄がおり、彼からの忍術・体術・技術など、諸々の教授も見込めるだろうから、より優秀な忍が誕生するのは間違いない。三忍の一人である大蛇丸をして敵わないと言わしめるイタチに師事するのだ。見込みは大きいだろう。

？里単位で見たメリットは、木の葉崩し発生確率の低下。うちは一族が揃って存続する事で、大蛇丸が徒に手を出し辛い状況になるのではないかと。つまりは、リスクとりターンを考えた時、極端に天秤が傾き、労力に見合わないバランスに変化すると予想したのだ。そうであって欲しい。

？ここでもし、クーデターが行われてしまった場合を考えよう。

？その場合、将来的に高い確率でサスケの抜け忍化が起こる。正直対処が面倒である。

是非とも押し折りたいフラグだ。

？それで、原作でサスケ奪還任務を受けた者の大半が下忍と言えど、三代目火影戦死の有事で里としてガタガタの時期に、自里の忍を追い掛ける為に態々貴重な労力を割かねばならないのは、些かどころか手痛い。手足を折つてでも連れ帰ると原作でナルトが言っていたが、対処としては正しくその通りで、実際そうだった時、俺なら初めから手足を叩き折って監禁しておきたいところ。個として動くのを悪いとは思わないが、そいつが里を抜けようとしていて、また希少性があり有用な能力を持つのであるなら、自重して貰わないと困るのだ。時期が時期なだけに、サスケから写輪眼を回収する事も辞さない。

？それも、不幸にも原作通りに話が進めばの話だ。血も涙もないような事はしたくない。出来る事なら仲良くしたいし。

？ただ、確かに、俺としても大蛇丸の元に行くのは少なからずメリットがある。うずまき一族の生き残りである香燐カリンと知り合うのは、封印術保存の面からは是非とも望むところ。彼女の同意があるなら子を設ける事も吝かではない。一族復興というのも、うずまき一族が散り散りとなった今、夢のある事のように感じるのだ。

？忸怩さておき話を戻すが、クーデターを回避出来れば国力低下は免れ、防衛力向上という里に益のある明るい未来と見える事が可能だと、色々考えた末、落ち着いた。

？ そんな訳で、最初期から阻止の方向で動いた。だが、方法について大いに悩んだ。

？ そもそも、クーデターの理由が曖昧であつた事が俺の頭を大いに痛ませた。

？ 対応改善が根底にあつたと思うが、「漂白」なるもののお陰で穴開きの知識に残つたのはそこまで。そこからは完全に推測となつた。

？ 確か、うちは一族は警察機関を一手に請け負い、住民からの信頼も一定以上あつた筈で、里の端の方に追い遣られた以外に目に見えた迫害はなかつた筈だ。それに「追い遣られてゐる」と言つても、そういう風にマイナスに解釈しようと思えば出来なくもない程度で、嘗てと——二代目火影の時代と比べて里の規模が大きくなつた現在では、槍玉に挙げるのはナンセンス極まりない。

？ 木の葉の治安維持はうちは一族ありき。火影であろうと、相談役であろうと、ダンゾウであろうと、決して無視出来ないくらいに重要度が高いのは、今更論ずるまでもない。クーデターに抛らずとも、言葉による待遇改善は望めたのではなからうか、と思うのは至極当然だつた。

？ 相談役を抜いた場で、互いに落とし所を探つていけば、血塗ろ・泥沼化は自ずと回避されて然るべき。相談役は歳も相俟つて頭が堅く、古い考えに囚われているので、その場から排除して物事を進めれば、それだけで大きな障壁は除かれたと考えても誤りではないだろう。

？そんな件の爺婆<sup>くだん</sup>。世話になつてゐる三代目火影に連れられて話す事が何度かあつたのだが、何と言うか、人柱力の扱いが過保護だつた。勿論「過保護」という表現は皮肉であり、彼等は面と向かつて俺の行動を制限すべきなどと吐<sup>ぬ</sup>かしおる。戦時中でない今、行き過ぎた愛国主義による不穏分子の排除を徹底しようとする相手との会話程、疲れるものはないと早々に学んだ。好んで相手にしたくはない。

？それに、うちは一族に偏見があるのはそういった上層部の部分的な者達だけ。住民としては身の安全を守つて貰<sup>もら</sup>へてゐる以上、感謝が大半だろう。

？また、うちは一族の立場に立つてみると、力のある不穏分子と言へば聞こえが悪く、危険性が高いが、全員が全員、反旗を翻<sup>ひるがえ</sup>そうとしてゐる訳ではない。平穩に暮らしたいと思つてゐるうちの者からすれば、強硬派はいい迷惑以上にはなり得ない。その所為で殲滅されるなど目も当てられない。

？里を愛する者として、ダンゾウなどの極端な考え方は俺には受け入れられないし、立場改善と銘打つて、強引な策に出ようとするうちの一部の考え方も、俺には受け入れられない。風味が違う。

？故に、クーデター回避に励んでいた。俺個人の力で出来る事など限られてゐるので、本人は自覚がないだろうが、三代目火影を矢面に立たせて交渉事の類は行<sup>おこな</sup>つて貰<sup>もら</sup>つた。？決定したのは以下の事。うちはの代表と三代目火影だけを話し合いの席に着かせる

のを先決として、第二にダンゾウの手によるシスイの写輪眼奪取阻止などうちは一族の安全確保。

？道筋を決めれば行動あるのみ。

？ある程度能力を付け終えた5歳程から、変化<sup>へんげ</sup>などの基本的な術から影分身など様々な術を駆使して根気よく工作を続け、結果、何とかクーデターの回避を成し遂げた。

？それも最近実を結び、交渉は当然の如く三代目火影頼みだったが上手くいって良かった。火影、相談役、ダンゾウ、うちはマダラを含むうちは一族と、誘導しなければならぬ対象が多過ぎて挫折<sup>さくせつ</sup>そうだった事をここに記しておく。

？自分でも驚くべきハイスペックさと幸運で上手く事が進んでくれて、そのように生んでくれた両親に深い感謝である。父<sup>かんぱ</sup>さん、母さん、ありがとう。

？その反動として、アカデミーの成績は芳<sup>かんぱ</sup>しくなかった。常に多重影分身を強いられ、そのフィードバックで非戦闘員に置き換えれば何とか彼等が日常生活出来る疲労困憊<sup>ひろうこんぱい</sup>具合。座学時なんかは気が付いたら眠<sup>ね</sup>っていて、体術の授業でも自分の番が回ってくるまで寝<sup>ね</sup>こけていた。引<sup>ひ</sup>つ込み思案なヒナタの「だ、大丈夫？」という気遣いが本当に有難<sup>ありがた</sup>かった。身に沁<sup>しみ</sup>み渡<sup>わた</sup>った。当然の如く惚<sup>ほ</sup>れた。「本気」と書いて「マジ」と読む程に。？そんな事もあって、原作のようにアカデミーの卒業試験を何度か失敗し、一段落ついた最近、漸<sup>ようや</sup>く卒業を果たしたところ。繰り返される補習と、不可抗力で夢の世界へ旅立

つ度に、青筋を浮かばせるイルカ先生の顔が忘れられない。手の掛かる生徒でごめんなさい。

？そして組み分けも原作通り。

？相も変わらず女子に人気の、イタチとの日常的な組手により下忍にしてはスペックが可笑しくなっているサスケ。歳相応の実力のサクラ。「問題児」認定されている成績ドケツの俺。そしてカカシ先生。

？自己紹介で「夢は？」と聞かれて「イタチを殺す事」から「イタチを超える事」と微笑ましいものに変化していた。頑張れよ、と応援しておく。

？因みに俺は「里を守る事」と答えた。そうしたところ、サスケから「ドベが粋いさがるな」と手痛い言葉を頂戴した。本気を出せば多分お前より強いからな、という気持ちは心に秘めておく。それで負けては恥ずかしい事この上ないから。俺は悪戯も何もしない大人しい子だから。

？そんなこんなでカカシ先生による試験当日。

？朝飯を抜いて来いとの指示を受けたが、ここ数年のチャクラ大量消費により朝飯を抜くと本当に動けなくなるポンコツ仕様に体が維持されてしまったので、気持ち普段より

軽い朝食をとってから向かった。

「まあ、クーデター回避のオーバーワークはこれでおさらば予定なので、徐々に一般的な12歳の燃費に戻ると思う。全快時なら三日三晩休息を挟まずに全力で戦い続けられるだろう体力であり、スタミナ総量で言えば体力バカだった三代目火影顔負けと推測され、密かに自慢になっている。世に言う俺TUEEEだ。ふはははは!!」

「おはよう諸君」

「おっそーい!!」

「早朝に集合予定だった筈が、今では充分空高く太陽が昇っている。にも関わらず、悪びれもなく登場した力カシ先生に、サクラが淑女にあるまじき怒声を上げた。序でに俺達皆揃って腹の虫の鳴く音も。」

「一応食べて来たのだが、既に朝ご飯は消化されてしまったようだ。相変わらず燃費の悪い体である。」

「盛大にぐぎゅるるうううと鳴らしたのを見て、力カシ先生が満足そうに頷く。丸太の上に時計を置き、12時に鳴るようセットした。」

「あーはいはい、サクラくん、せっかちな女の子は嫌われるぞ。さて、試験内容だが話は簡単、ただの鈴取りだ。俺から鈴を取れば合格。取れなければ不合格。それを昼まで熟して貰う。な、簡単だろ?」

？サスケを流し見てサクラを脅すような言葉を掛けると、カカシ先生は腰の忍具入れから鈴を取り出し、チリンチリンと鳴らして試験内容を説明した。

？そこも原作と変わりないようで数は2個。必然的に仲間割れを誘発させる思惑があるようだ。指摘したサクラの答えとして、全員に聞かせるようにそういう旨を告げていたから間違いない。子供に対して意地が悪い。

「もう質問はないな？」

？各々の顔を見て疑問がない事を確認し、

「殺す気で来ないと取れないからな。じゃ、スタート!!」

？掛け声を合図にカカシ先生を除く面々は、演習場を取り巻く木々の影に思い思いに身を隠した。

？◇

？さてはどうしたものかと、俺は木陰に息を潜め、攻略の方法を考えていた。

？試験というからには、そして卒業したからには、早い段階で「問題児」という汚名を返上してチーム内での地位を確立しておきたいところ。

？アカデミーでの俺は本当の俺ではない、力を隠していたのだ、などと、クーデター回



避という止むを得ない事情があったのだから阿呆のように厨二病振るつもりは当然ないが、今の自分の力を過信して「俺一人で充分だ」と言うサスケや、「きやーっ!!?サスケくうーん!!」でこっちの話を少しも聞こうとしないサクラと意思疎通出来る程度には関係を良くしておかなければならないのは明白。後々の任務に支障を来すのは目に見えている。原作のように1人で突っ走って貰っては困るのだ。

? 故に、今回の試験では、否が応でも実力を買って貰わなければならない。最初は邪魔と思われるような、試験終了後に協力してくれてよかったと思わせなければならない。ツンデレなサスケには、これはなかなかハードルが高いと言わざるを得ない。イタチという高過ぎる目標があるから尚の事。

「はあ……、しゃあない。やるだけやるか」

? 額当てとその付随した布で、右目以外を隠した力カシ先生が、演習場のド真ん中で本を片手にニマニマしている。

? 本とは彼<sup>か</sup>の有名なイチヤイチャパラダイス。俺はあれに、実に、大いに興味がある。R―18指定であるから今の俺では手が届かないが、それはもう、原作のナルトのようなお子様ではないため興味がある。正直、鈴よりあちらを取りたい。出来る事なら取るう。

? サスケをどうしようかと沈んで溜め息を吐いたが、もつと分かり易い目標が定まった

事でやる気が沸いて来る。我ながら現金な奴である。

（影分身の術）

？印を組み、5人に分身する。

？アイコンタクトを取ると、分身体が意味を理解し方々に散って行つた。

（気付いた様子は……あり、か。気配消したところでやっぱ近過ぎるよなあ）

？木陰からカカシ先生の様子を確認すれば、一瞬の空白。葉擦れの音で即バレのようだ。

？無論、その仕草としては決して大きなものではない。滞る事なく上から下、右から左と紙の上を滑っていた右目が、何かに引つ掛かるように一瞬止まった。それだけだ。

？それだけだが、一度も引つ掛かる事なく今の今まですらすら読んでいたところでその反応は大き過ぎる。下忍相手という事で油断があるのだろう。

？何にせよ、流石は上忍にして暗部も務める人だ。勘が鋭い。けれども、何の術を使つたかまでは分からないだろう。喻え分かつたとしても俺とは思うまい。

？……いや、気配で分かるか。下忍らしく甘い隠し方の2人と違って、ある種の戦場で磨かれた俺の気配消しは暗部とそう大差ない。寧ろ禁術巻物の書庫に忍び込む関係上、三代目火影を相手にする事もあつて場合によつては暗部以上かもしれない。消去法で今の行動が簡単に俺と割り出される。

（ある意味不利だったな……）

？と言っても、この試験に合格して初めて下忍と名乗れる俺が、同じく下忍の卵に求めている気配消しのレベルではなかったな。

？溜め息を吐いたところで、茂みからオレンジ色の影が3つ飛び出した。3人は両手にクナイを持ち、カカシ先生に突貫する。俺の影分身である。

？気付かれたからにはサスケが動き出すのを待つのは得策ではない。こちらを陽動としてサスケを誘き出す、<sup>おび</sup>という言い方はニユアンスが少し違うが、サスケの行動を促す事としよう。

「分身……いや影分身か……?!?! 気配の消し方といい、どうしてお前がドベだったのかねえ」

？本から目を離し、グルツと見遣ったカカシ先生。訝しげに本を閉じる。

？その3方から影分身は挟撃を仕掛け、駆けながらクナイを投げた。全身の比較的大きな急所を目掛け、ヒュンツと鋭く、遠慮なく、6本のクナイが空<sup>くう</sup>を切る。殺意を持って飛翔する。

？瞬時に、カカシ先生との距離が詰まった。が、カカカツと小気味良い音を立て突き刺さり、変わりり身を使ったのだと理解した。カカシ先生だったものが丸太に変わる。

？直後、

「奇襲なら準備からもつとバレないようにね——っ!？」

？背後から声がかかった。

？半ば予想していたため行動は速い。それより自らを囿とする思惑もあったので油断して引つ掛かつてくれて万々歳。

？影分身の放った手裏剣が右手側から襲来する。それも1枚2枚ではない。無数に。徐々に数を増やして壁のように。

？手裏剣影分身。忍具を対象に影分身を掛ける地味な術だ。

？木に幾つも突き立ちながらも、射線を確保していたために目標通り、俺の居座る場を押し潰す勢いで押し寄せる。その場に俺はもういない。林の中からずり滑るように影分身の残る中央の広場に踊り出る。カカシ先生も身の危険を感じて何処いずこかに。

「よし、アレだ」

「『了解』」

？変わり身に使われた丸太からクナイを回収して集まる影分身と視線を交わす。我が半身という事で意思を汲み取り、1人が煙玉を用意して煙を焚いた。

？本体がどれかを攪乱させるためのシャッフルである。ただ、カカシ先生の嗅覚は犬もかくやの高性能。微妙な匂いの差異でオリジナルを嗅ぎ当てられるかもしれない

「っ!？」

？可能性を考慮していたのも束の間、地面から微かな振動が伝わる。カカシ先生の使用する術の一端を知るからこそ、気付ける異質な微振動。

？煙から抜けるように四方に飛び退る。最中、頭上に向けてクナイを投擲した。

「うわあああ!!?」

？白煙の中から悲鳴が響く。逃げ遅れた1人がカカシ先生の術に嵌ったらしい。

？その悲鳴が聞こえた丁度その頃、これまで林の中に身を隠していた1人が、木の上から大きく跳躍。空中で拳を握り、右腕を大きく後方へ引き絞っていた。

「ふっ!!」

？そのままオリジナルや分身の離脱する動きによって攪拌され、薄らいできた煙目掛けて着地と共に解き放った。

「なっ……!!?」

？ドゴオッ!!とただ殴っただけでは有り得ないような音を伴い、広場に広く地割れが走って捲れ上がる。

？後方の茂みからサスケの驚嘆。

？地盤の影でカカシ先生も目を見開き、急いで地上に躍り出る。

？そこに特攻。地面に引き摺り込まれて消えた者を除く、広場の全員で攻勢に出る。

？最も近かった分身体がクナイを構えて体術を仕掛けた。

？腹部を狙って突き。それを手の甲で先生が軽く弾く。大人と小柄な子供という覆し<sup>くつがえ</sup>難い体格の差により難なく逸らされ、勢いのまま上体が泳ぐ——否、泳がせる。分身の首筋目掛けて手刀が迫る。

「っああっ!!」

？バネのように。射出機のように。2人係で腕を繋いだ1人を、パチンコの玉に見立てて引つ張り飛ばす。

？足を大きく前へ一步。大遠投するように体を開いてぶつ放す。

？グンツと距離を詰めた。体勢を泳がせた一方が、カカシ先生の脇を抜ける前転。そうして頭を下げたところで放物線を描いてクロスチョップの姿勢で襲撃した。

「っ……!! トリツキーな奴だ……!!」

？印を組む。慣性の法則そのままに、3人になって人型ミサイルが到達した。と思われる瞬間、霞んで見える腕の動きで印が生まれ、土の壁が現れた。影分身が激突してボンと消える。

？横に抜けていた1人が再度体術を仕掛けに出る。低姿勢からの足元を刈る回し蹴り。後ろに退<sup>さが</sup>られないよう、速攻で土壁を迂回してもう1人は頭部を刈り取るジャンプ染みたハイキック。俺本体でカカシ先生自らの出した土壁と挟んで、胴体目掛けてクナイを持って突撃する。

「まだ甘い!!」

？カカシ先生が壁を蹴った。地を蹴り回し蹴りを避けたと同時に、土流壁により形成された壁を更に蹴り、跳び上がって時計回りに体を捻る。頭部を狙っていた影分身の下から右手で裏拳を叩き込み、軌道を強制的に上方修整。掬い上げられ、可動域の限界に至った分身体が小さく呻き、体を後ろに逸らして倒れ行く。そして逆の手で抜いていたクナイを、裏拳を放った手に鋭く移し、突き出した俺のクナイを切り払った。序でに足を狙った影分身も、回避する間もなく切り捨てられた。

「流石先生……!!」

？正直尊敬しかない。平時の気の抜けた雰囲気とは比較にならない程切れ味の良い鍛えられた空気。歴戦の古<sup>ふる</sup>兵<sup>つわもの</sup>を連想させる若き志士。これが木の葉の白い牙の息子、その本質か。

？なるほど、父の教え子はこれ程まで天才で優秀か。だが、その額当ての下に隠しているものも、潔く出して貰おうか。

「アカデミー上がりにしちや上出来どころか異常だね。ま、昼まで寝ときなさい」  
？手刀が振り翳<sup>かざ</sup>される。

## 卒業演習2

？俺にとって——誉れあるうちは一族の一員であるうちはサスケにとって、うずまきナルトは自己主張の乏しいのんびり屋、それでいて不真面目な同級生だった。

それ以上はなく、ただ、ウストラトンカチという目に入れる必要性を全く感じさせない雑魚だった。

？それが今日、蓋を開けてみればどうだ。

「信じらんねえ……」

？あれがアカデミーの落ち零れ？？あれがその、うずまきナルト？？カカシとやり合っている様はまるで別人ではないか。

？カカシの話はイタチから聞いた事がある。「写輪眼のカカシ」の二つ名で他里にまで知れ渡る、うちではない写輪眼の使い手。

？額当ての下に隠した目を使っていない事から本気ではないのだろうが、それでもあのナルトが上忍とやり合っている。

？ナルトは実力を隠していた？——いや、そんな事はない筈だ。



？アカデミーでのあいつの体術は下忍相応。違和感なく、他の有象無象の中に溶け込んでいた。

？忍術にしても、チャクラの割り振り方がド下手で不発が殆ど。センスの欠片もない、忍者にして忍術が使えないという無能っぷり。

？手裏剣などの飛び道具の扱いも辛うじて木版には突き刺さるが、的には当てられないノーコントロール。

？総評して、ドベに相応しい不出来っぷりだった。そうだった筈だ。四六時中眠そうにしていた以外は他の者と変わらない、捨て置く事に何の戸惑いも抱かせない存在だった。

？だと言うのに、

「何だ今の術は……!?!」

？気配を隠すのも忘れて叫んでいた。

？煙の中の行動に確証は持てないが、拳を振り上げ飛び込んだモーションから推測されるのは、その勢いのままの「振り下ろし」。

？素手で地面を割った、とでもいうのか??それも地震が起きたかのような激震で以て? ?あれは元々の馬鹿力故の結果なのか、それとも何らかの術による補助故なのか。何にせよ、あんな術は当然見た事がなければ、イタチから聞いた事もない。完全なる未知。

？影分身にしたって下忍のスタミナで何人も作るのは非効率極まりない。分身体それぞれにチャクラを等分するのだ。ただでさえ少ないチャクラを分けるなど、真面まともに他の術が使えなくなるリスクがある。

？やはりあいつはバカなのか？？そう自問すれば、答えは「否」だ。地面を割った影分身は今も力カシに噛み付いている。まだまだ余力があるようだった。

？つまり、4人に分身して尚、チャクラに余裕があると言う事。

「化け物かあいつは……！」

？悪態を吐いてしまうのも致し方ない。

？俺達が見ていたナルトは一体誰だ。そう思えてしまう程に落差が酷い。

？本当にあいつは、誰なんだ？

？◆

？鷹が生む子はやはり鷹か。

？先生によく似た——波風ミナトによく似た黄金こがねの髪に、青い瞳。普段の優柔不断そうなどころもそっくり。極め付けに忍術のセンスまで受け継ぐとは。

？俺が——はたけ力カシがこれから受け持つかもしいない1人は、まるで四代目火影の

生き写しのようにだった。

？下忍であるにも関わらず、影分身を扱い、それも複数人。九尾のチャクラがあるといつても秘匿され他里の人柱力のように十全に、そもそも自分が人柱力である事すら知らされていない現状、安定して行使出来ているというのは素の——うずまきナルトとしてのチャクラが下忍以上、上忍に届こうとする証拠。

？チャクラという点で既に傑物。

？加えてチャクラコントロール。綱手様のチャクラ一点集中を苦もなく熟し、それにより影分身が消えていない事から必要最低限度を放出するに止めたという事。

下忍の拙さが削ぎ落とされ、医療忍者並の緻密さだ。手放しで賞賛しても誰も文句の言えない完成度。

？こいつがアカデミーではドベ？

イチヤイチャパラダイスを読む暇がない時点で正気を疑う。アカデミーは何時から上忍に比肩する下忍の卵をポイポイ量産する場になったのだ。常識外れも甚だしい。

？上忍の気付けない気配の消し方を、三代目火影の編み出した手裏剣影分身を、事もなげに出来るアカデミー生がイタチ以来早々そうそういて堪るものか。分身体を囨とする、と教本で教えられながらも、自らを囨にする事に躊躇しない肝の座った生徒がぞろぞろといろなど、それこそ有り得て堪るものかと叫びたくなる。

？だが、体術はまだ不慣れ。それでも下忍不相応ではあるが、付け入る隙は幾らでもある。

？俺の横に抜けたナルトの分身が、再度体術を仕掛けに出た。低姿勢からの足元を刈る回し蹴り。

？そして俺に退られ<sup>さが</sup>ないようにと考えたであろう、影分身による捨て身タックルを防いだ土壁を迂回して、もう1人が頭部を刈り取るハイキック。

？更にもう1人が俺を土壁と挟んで、胴体目掛けてクナイを持って突撃した。

？しかし、だ。それでやられてやる程甘くはない。

「まだ甘い！」

？地を蹴り回し蹴りを避けたと同時に、土流壁により形成した壁を蹴り、跳び上がって時計回りに体を捻る。

頭部を狙っていた影分身の下から右手で裏拳を叩き込み、軌道を強制的に上方修整。

掬い上げられ、可動域の限界に至った分身体が小さく呻き、体を後ろに逸らして倒れ行く。

？体勢が崩れたのを知覚して、逆の手で抜いていたクナイを裏拳を放った手に鋭く移し、ナルトの突き出したクナイを切り払う。と、序<sup>ついで</sup>で足元を狙った影分身も切り捨てた。

「流石先生……！」

？ 爛々<sup>らんらん</sup>と青い目を輝かせてナルトが笑う。

？ 純粹に戦闘を楽しんでいる様子の先生の子。

？ こいつはまだまだ強くなる。直ぐにでも俺を追い越す勢いで、歴代の火影に迫る勢いで。

？ だからこそ、今はここで叩いておく。

？ お前は強い。だが、「今」に満足して貰つては、昨日お前が宣言していた「里を守る」なんてのは到底叶えられる夢ではない。だからこそ、這い上がれ。越えるべき障壁として俺を見ろ。

そしてより、強くなれ。

「アカデミー上がりにしちや上出来どころか異常だね。ま、昼まで寝ときなさい」

？ 感情を表に出さないよう、今日程苦勞した事はないだろう。

？ 自然と緩みそうになる口元を引き締め、俺は手刀を振り翳<sup>かざ</sup>す。

首筋に落とせば意識を刈り取る事が出来るだろう。これでナルトとの組手は一先ず<sup>ひとまず</sup>終わりだ。

「でも——」

「っ!？」

? 瞬間、悪寒が駆け巡った。

? 首の裏から背筋<sup>せすじ</sup>までを、千本の先で撫でられたような背筋の凍る感覚。幾ら感じても慣れる事のない、忍びとしての危機察知。

? 出処は――

「――影分身か……!」

? 試す色合いの視線が俺を射抜く。

? 特大の危機察知により僅かに鈍った手刀がナルトに届くには時間が足りない。

? そも、意識を奪ったところで術が発動しないとも限らない。

この短い戦闘で理解した下忍不相応の実力の持ち主は、倒れる直前まで術を編み上げ行使する気合いを間違ひなく持つている。下手をすれば気を失つてでも発動する異常なタフネスさを兼ね備えている。

? これが無関係な他国の忍びであれば何の躊躇もなく離脱出来たのだが、今回はそうも言つてられない。

これからの教え子だ。重度に自傷してしまつては目も当てられない。

医療忍術があるといつても限度がある。そして影分身から感じる脅威はそれを超えて傷を負う危険性を孕んでいる。

(厄介な……)

？心の内でそう零してしまうのは不可避。

？殺す気で来いと言った手前、忠実にその言葉を守っているのだろうが、想定していたものより何倍も苛烈。ある点では真に実戦を想定していると言っている。追いつめられた時はせめて相手も道連れに、という嘗て経験した戦時中の心意気だ。

？何故ナルトの中でその考えに至ったのかは不明だが、もしかすると暗殺の危険に度々晒されていたのかもしれない。

？それは別段不思議ではない。ナルト自身には伏せられているが、10年以上前に里を半壊させた九尾がこいつの中には封印されている。封印されているだけでこいつがどうこうした訳ではないのだが、「九尾を封印されているくらいだからナルトも悪い」と頭の痛くなる無茶苦茶な理論を展開する者も、里の半壊という実害を被った以上少なくとも。その中に排除しようと動く者がいたとしても、有り得ない話では決してなかった。

？望む望まざるに関わらず、自然と鍛えられてしまったのだろう。

？それでも、里を守りたいと言ったこいつはお人好しが過ぎる。

「——こいつはどうです？」

？滑らかに、手馴れたように体の正面で構えられた片手印。

？それが、合図となった。

「ぐっ!？」

ナルトの皮膚が内側から膨張する。

まるで爆弾のように。そして事実、それは分身爆発であつた。

?ボンツ!?!と影分身が炸裂する。

全身を襲う衝撃。ナルト本体を攫う間もなく暴力的な高温の風圧に晒される。

俺は無造作に雑木林に弾き飛ばされた。

体がガザガサと葉を分け、メキメキと枝を折り、辛うじて身を捻つて幹に受身を取る。俺の通つてきたところが歪な空白を生み、広場にまで視線が通るようになっていた。

広場にはモクモクと土煙が立ち込める。その中にももの動く気配はなく、慌てて額当てをずらして左眼の写輪眼によって直接的にチャクラの流れを確認した。

「ツ……!!?!」

そこで視認したのはある意味で常軌を逸した存在だつた。

一瞬で露と消えたとは言え、その在り方は人の身に収まつた9本の尾を持つ狐——九尾そのもの。高濃度のチャクラが外部へと形を持つて現れていた。

しかも本来であるなら大気が震えるような違和感を覚えるというのに、何らかの被膜に包まれたかのように外界への影響が皆無。完全にチャクラが遮断されていた。

俺の動揺は最早正常に卒業演習を熟<sup>こな</sup>せるようなものではなかつた。どういう理由にせよ、三代目にナルトの尾獣化の件を伝えない訳にはいかなつた。



サスケやサクラには悪いが、俺は演習を切り上げるため動き出した。

## 思いつきの設定

## 魔法科高校の劣等生

? 四葉真也。  
よつばしんや

名前は 四葉真夜・深夜が『シンヤ』とも読めるところから。特に真夜の憎悪を色濃く受け継ぐようにとの願いから『真也』。

四葉真夜の卵子を人工授精し、四葉深夜を代理母として生まれた四葉家長男。

原作の達也のように性格の変容がなされ、一族に対する愛情と、憤怒の感情を強く残された、熱し易く冷め難い——気に食わなければ悉くを破壊する激情家。

? 彼に望まれるのは一族に仇なす者等への徹底報復。

同時に、司波深雪が四葉家の縁者である事を時が来るまで秘匿するための隠れ蓑であり、四葉家が不可侵領域であることを今以上に周囲に刷り込むための警鐘。

その『警鐘』である彼の感性からして気に食わないことには正面から突つかかるという、大凡十師族らしからぬ態度を見せるため、将来卒業してからのことも見越して四葉の十師族入りを疑問視する声も。

突つかかるといふ例を挙げれば、原作1巻での深雪の取り合いに遭遇した場合、見苦しいとの観点から戦略級魔法師足り得る魔法力によつて威圧するなど。深雪が冷気を発するならば、真也は得意魔法の性質（後述）から根源的な恐怖を植え付ける。

ブランシユの件であれば情状酌量の余地なく、関わった者全てを血祭りに上げる勢いであり、九校戦では深雪に危害を及ぼそうとしたとして、達也同様に——否、達也以上に激情を露にし、実際に制裁を下していたことだろう。

横浜騒乱編は達也・深雪が関わる以上、暴走待ったなし。

真也は達也のような質量爆散による物理的な戦略級魔法師ではなく、精神的な戦略級魔法師。  
マテリアル・バースト

得意とするのは精神干渉系魔法『ギンヌンガガブ』。

対象の感情の強制増幅という効果を持ち、それはどんな些細なものであれ、例えば夏の蚊への苛立ちであつても、増幅して耐え難い殺意へと変貌させる。

殺意の振れ幅を調整して同士討ちを誘発することも可能であり、逆に歓喜を大きく引き上げて笑死させることも、性欲を高めて強姦させることも、悲愴により自死を選ばせることも、快楽を煽つてイキ狂わせることも、対象に干渉できるのであれば思いのまま、意のままに操ることができる。

干渉範囲は当然にして魔法力の及ぶ範囲であるが、レジストすることも可能。しかし

接触して干渉する場合の成功率はほぼ100%。

言葉による誘導で意識が僅かにでも求めた方向に向けば、そこから樹形図のように想起させて特定の感情を掘り起こすことも可能なので、対個人で使用する場合は特に上げつない程の効力を示す。（「爪の間に針を突いたら」と痛みを想像させる言葉を放ったり、「発泡スチロールを擦り合わせる音は？」と不快感を抱いた経験を思い起こさせたり、そんな体験したことを少しでも頭に浮かばせることで、それを倍々にして体にフィードバックさせる）。

『とてもハマりやすいマインドコントロール』をイメージするのがしつくりくるかもしれない。

また達也のように通常の魔法が使えない、ということがないので、深雪の隠れ蓑として十分に期待でき、『四葉』という分かりやすいネームバリューも加えて相手に詮索させる隙を与えにくい。